

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (Cedep) ・
ベネッセ教育総合研究所 共同研究

「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクト

乳幼児の生活と育ちに 関する調査 2017-2020

0～3歳児期

東京大学 Cedep とベネッセ教育総合研究所は、
子どもの成長のプロセスを明らかにするための縦断調査（追跡調査）を共同で進めています。
本冊子は、第1～4回調査の主な結果をまとめたものです。

1 子どもの生活と発達

就園状況、保育環境	p.6
生活リズム	p.7
生活時間	p.8-9
デジタルメディア	p.10
生活習慣	p.11
運動発達	p.12
認知発達	p.13
社会情動的発達	p.14-15

2 母親・父親の生活と子育て意識

夫婦の子育て	p.16
父親の子育て	p.17
母親・父親の子育てに対する意識	p.18
母親・父親の働き方	p.19

3 新型コロナウイルス感染症と親子の生活

母親・父親の働く環境	p.20
子どもの生活や様子	p.21

4 親子の関わりと乳幼児期の発達

養育行動とアタッチメント形成	p.22-23
----------------	---------

「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクトについて

研究プロジェクトの目的

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）とベネッセ教育総合研究所は、乳幼児の生活や発達について縦断的に研究するプロジェクトを共同で進めています。このプロジェクトは、子どもの生活や保護者の子育ての様子を複数年にわたって調査し、それらが子どもの成長・発達とともにどのように変化するのかを明らかにします。これにより、よりよい家庭でのかかわり方や子育て支援のあり方について検討することを目的としています。

研究プロジェクトの特徴

1 子どもの生活や発達、保護者の子育ての「今」をとらえることができる

このプロジェクトでは、2016年度に生まれた子どもをもつ保護者（調査モニター）に対して、毎年1回継続して調査を実施します。これにより、子どもの生活や発達、保護者の子育ての実態などの「今」の様子を明らかにできます。

2 子どもの成長・発達の「プロセス」と「因果関係」をとらえることができる

このプロジェクトでは、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また保護者のかかわりや意識はどのように変化したり、子どもの成長・発達に影響を与えたりするのかといった、親子の成長・発達の「プロセス」や「因果関係」を明らかにします。

3 母親・父親の意識や養育行動について幅広くとらえることができる

調査実施にあたり、調査票を世帯単位で配布して、保護者2名（主に母親・父親）に回答を依頼しています。そのため、養育行動や子ども・子育てに対する意識について、母親・父親の共通点や相違点、またその変化を幅広くとらえることができるとともに、夫婦関係が子どもの成長・発達に与える影響なども明らかにできます。

研究プロジェクトのメンバー（2021年3月時点）

東京大学大学院教育学研究科長・教授 秋田喜代美

東京大学 Cedep センター長・教授 遠藤利彦

東京大学 Cedep・准教授 野澤祥子

東京大学社会科学研究所教授 佐藤香

慶應義塾大学総合政策学部教授 島津明人

大阪教育大学教育学部准教授 小崎恭弘

東京大学高大接続研究開発センター准教授 宇佐美慧

東京大学大学院博士課程 大久保圭介

東京大学大学院博士課程 唐音啓

ベネッセ教育総合研究所 所長 谷山和成

ベネッセ教育総合研究所 主席研究員 木村治生

ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室室長／主席研究員 高岡純子

ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室 主任研究員 岡部悟志

ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室 主任研究員 真田美恵子

ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室 研究員 李知苑

調査概要

- 方法：郵送法（自記式質問紙調査）
- 地域：全国
- 対象：2016年4月2日～2017年4月1日生まれの子どもをもつ家庭 3,205世帯（調査モニター）から開始
- 時期：2017年9月～10月（子どもの年齢：0歳6か月～1歳5か月）から毎年9月～10月に実施

	0歳児期 (0歳6か月～1歳5か月)		1歳児期 (1歳6か月～2歳5か月)		2歳児期 (2歳6か月～3歳5か月)		3歳児期 (3歳6か月～4歳5か月)	
発送世帯数	3,205		3,021		2,673		2,245	
回収数	主	副	主	副	母	父	母	父
	3,005	2,750	2,554	2,390	2,356	2,232	2,057	1,949
回収率	93.8%	85.8%	84.5%	79.1%	88.1%	83.5%	91.6%	86.8%
分析対象数 (0歳児期からの 継続サンプル)	2,975	2,624	2,409	2,038	2,119	1,754	1,906	1,537

※本研究プロジェクトの調査モニターの世帯に調査票を配布した。調査モニターは、全国の対象月齢の子どものリストから、全国7地域の出生数の比率（厚生労働省「人口動態統計」2016年度）に応じて抽出した「調査モニター募集対象者」に対して、2017年7月～8月にかけて募集した。

※0～1歳児期は「主となる養育者／副となる養育者」、2～3歳児期は「母親（またはそれに代わる方）／父親（またはそれに代わる方）」に回答を依頼した。誰を「主／母親（またはそれに代わる方）」「副／父親（またはそれに代わる方）」とするかは、回答者に委ねた。

※本冊子では、同じ子どもの発達や生活の変化を捉えるため、「乳幼児の生活と育ちに関する調査2017」、「同2018」、「同2019」、「同2020」のいずれも回答があった世帯（回答者として最も多かった「主となる養育者／母親（またはそれに代わる方）」が「母親」の世帯）について報告する（母親1,906人、父親1,537人）。

主な調査項目

① 子どもの気質や生活

〈出生時〉在胎週数、体重
〈気質〉
〈睡眠〉起床、就寝時刻、午睡時間
〈保育〉就園状況（園種別、時間、園での経験）
〈メディア〉利用時間、内容、目的、使い方
〈習い事〉
〈生活習慣〉

② 子どもの発達

身長、体重
運動発達、アタッチメント
認知発達、社会情動的発達

③ 親のwell-being等

デイリーハッスル
子育て肯定感・否定感
子育て観・教育観
配偶者との関係
ストレス
QOL、幸福感
抑うつ

④ 親の養育行動や生活

【妊娠・出産期】
妊娠期の生活習慣、情報収集、夫婦関係、出産体験、出産後の状況

【子育て期】

〈生活・子育て〉
養育行動
生活時間（家事・育児・睡眠等）
子育てのサポート
〈夫婦〉家事・育児分担比率
〈職場〉職場環境、労働時間

⑤ 基本属性

子どもの性別、きょうだい数、出生順位、配偶者（同居・離死別）、回答者の属性（年齢、学歴、就業形態・日数・時間、帰宅時間）、世帯年収

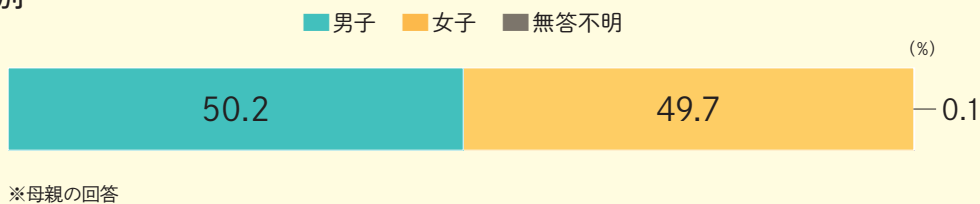
データを読む際の注意点

- ① 図表内の（ ）はサンプル数を示している。
- ② 図表で使用している百分率（％）は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。
- ③ 子どもの生活や発達、世帯年収は「主となる養育者／母親（またはそれに代わる方）」にたずねたため、母親の回答を分析している（図表中に「母親の回答」と明記）。

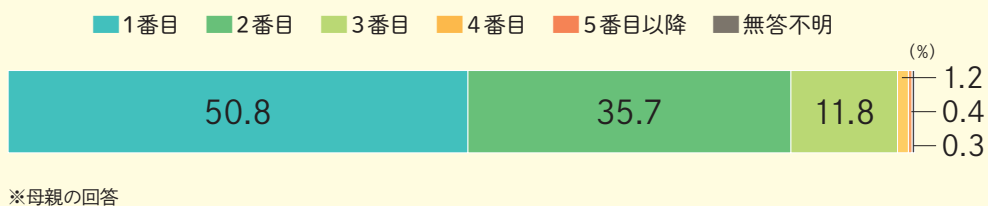
*本調査は東京大学ライフサイエンス委員会倫理審査専門委員会の倫理審査の承認を受け、実施しています。

基本属性（子ども・世帯、3歳児期）

子どもの性別



子どもの出生順位

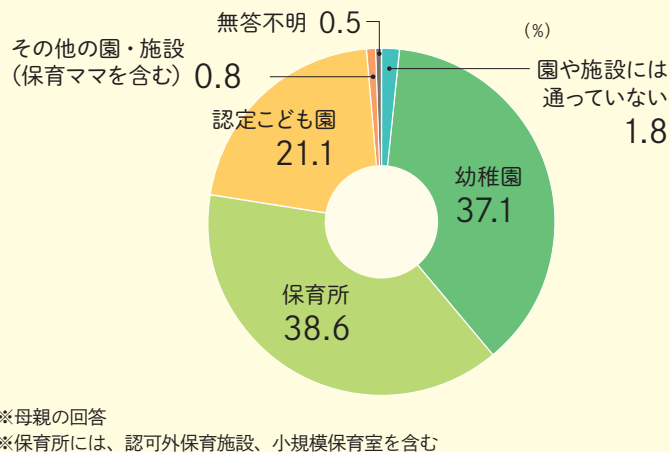


子どもの月齢

		(%)	
3歳6か月	8.3	4歳0か月	9.3
3歳7か月	5.9	4歳1か月	9.0
3歳8か月	8.2	4歳2か月	8.9
3歳9か月	8.8	4歳3か月	7.5
3歳10か月	8.9	4歳4か月	7.3
3歳11か月	10.4	4歳5か月	7.3

※母親の回答

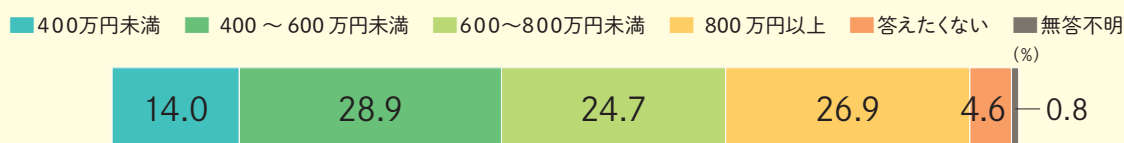
子どもの就園状況



居住地域



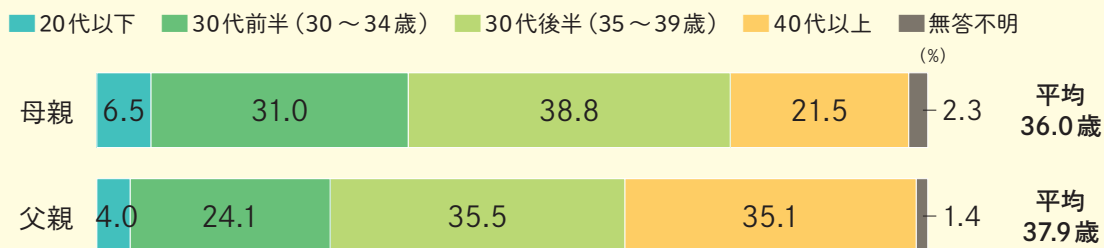
世帯年収



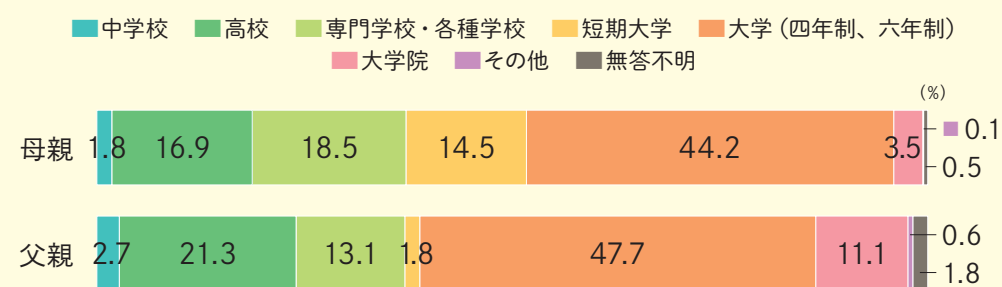
※母親の回答 ※「400万円未満」は「200万円未満」＋「200～300万円未満」＋「300～400万円未満」、
「400～600万円未満」は「400～500万円未満」＋「500～600万円未満」、「800万円以上」は「800～
1000万円未満」＋「1000～1500万円未満」＋「1500～2000万円未満」＋「2000万円以上」

基本属性（母親・父親、3歳児期）

年齢

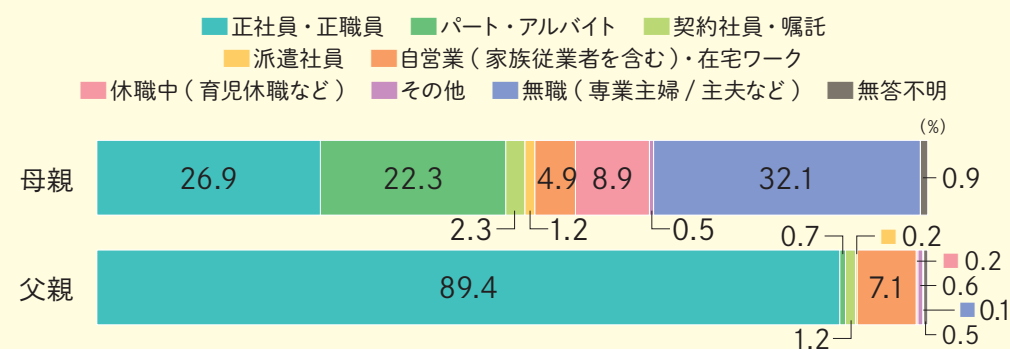


最終学歴

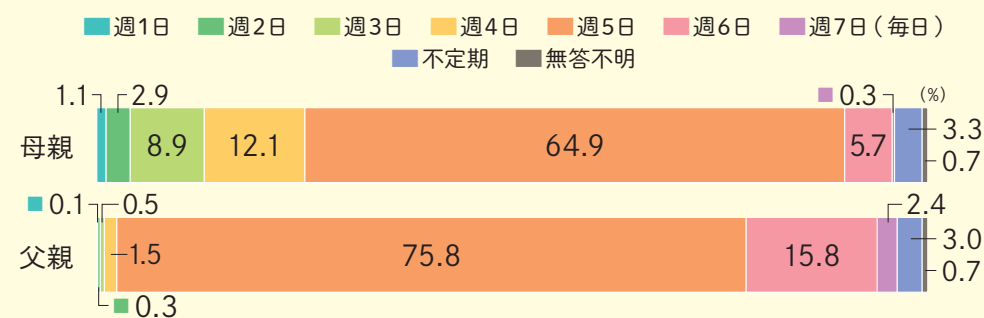


※ 0歳児期に聴取

就労状況



有職者の週あたりの労働日数



※就労状況が「休職中」「無職」「その他」を除く、有職の母親 1,098人、父親 1,515人の回答

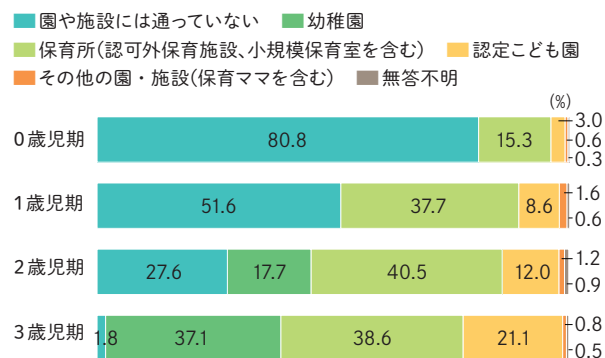
就園状況、保育環境

3歳児期になると、ほとんどの子どもが就園。
子どもが成長するにつれ、子育てについて相談できる友だちが増加。

「園や施設には通っていない」と回答した割合は0歳児期で80.8%であるが、3歳児期には1.8%まで減少しほとんどの子どもが就園している（図1-1-1）。園で過ごす時間は、0～2歳児期には「8時間くらい」「9時間くらい」が約半数を占めるが、3歳児期には幼稚園への就園に伴い「5時間くらい」「6時間くらい」が増えている（図1-1-2）。図1-1-3では、いずれの年齢においても「保育者の子どもへの言葉かけや関わり方が温かい」など、保育の環境に対して9割以上が「とても＋まああてはまる」と回答しており、保育への高い評価は継続している。保護者と周囲との関係をみると、年齢が上がるにつれて、「子育てについて相談できる（あなたの）友だちが園にいる」は増加傾向にある。

Q 対象のお子様について教えてください。

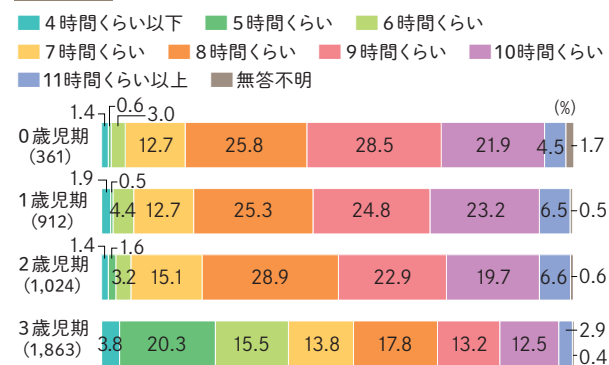
図 1-1-1 就園状況



※母親の回答

Q 1日のうち、どれくらいの時間を園(幼稚園、保育所、認定こども園、その他の園・施設)で過ごしますか。

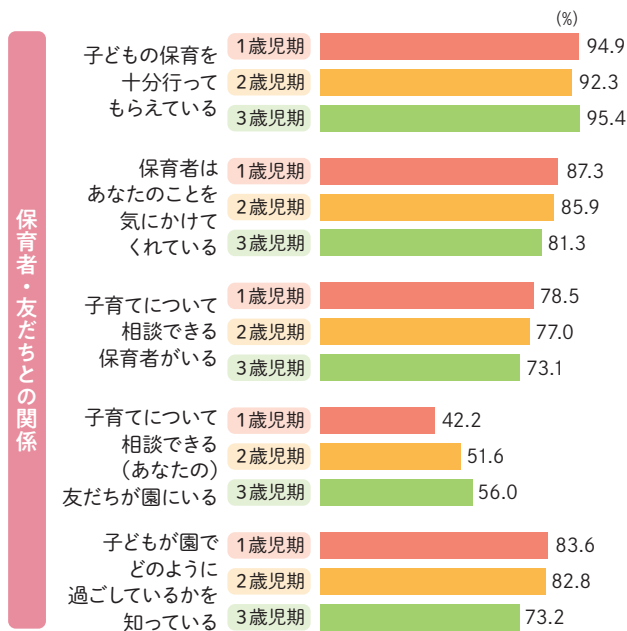
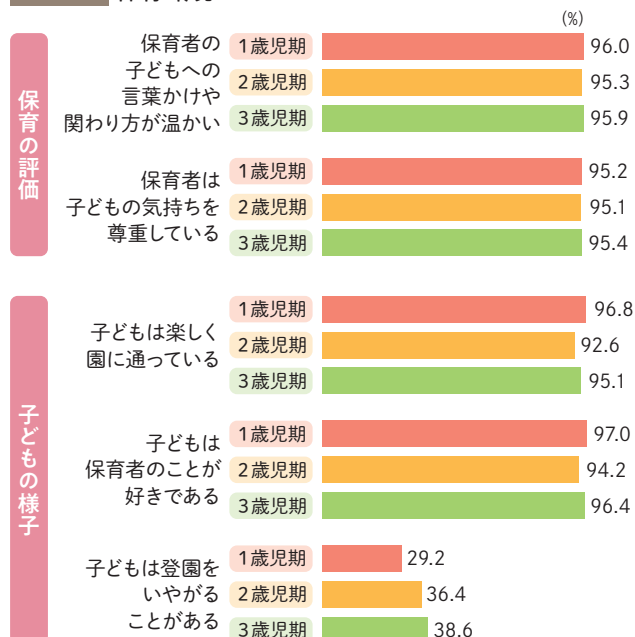
図 1-1-2 園で過ごす時間



※母親の回答 ※就園している人の回答 ※「4時間くらい以下」は「3時間以下」+「4時間くらい」、「11時間くらい以上」は「11時間くらい」+「12時間以上」

Q 対象のお子様が(定期的に)通う園について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図 1-1-3 保育環境



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答 ※就園している、1歳児期 912 人、2歳児期 1,024 人、3歳児期 1,863 人の回答

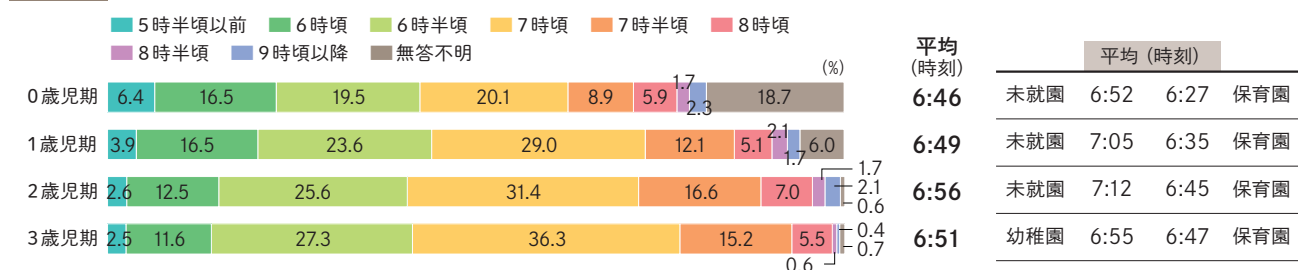
生活リズム

3歳児期の77.7%が「7時頃」までに起床、75.3%が「21時半頃」までに就寝。
子どもが成長するにつれ、昼寝時間は減少し3歳児期では「しない」が約3割。

図1-2-1～3で子どもの起床時刻、昼寝の時間、就寝時刻の4年間の推移をみると、いずれも0歳児期に約2割であった「無答不明」が、2歳児期にはほとんどなくなる。子どもの生活リズムが不規則で回答できず「無答不明」だったと考えると、2歳児期までに成長とともに生活リズムが整っていったと考えられる。昼寝の時間は年齢が上がるにつれ減少し、3歳児期になると31.5%が「しない」と回答する。また、3歳児期における起床・就寝の平均時刻、昼寝の平均時間は、就園状況による違いが大きい。起床時刻は幼稚園児より保育園児のほうが8分早い、就寝時刻は幼稚園児より保育園児のほうが29分遅い。一方で、昼寝の時間は幼稚園児より保育園児のほうが約1時間長い。

Q 対象のお子様は平日、何時頃に起きますか。

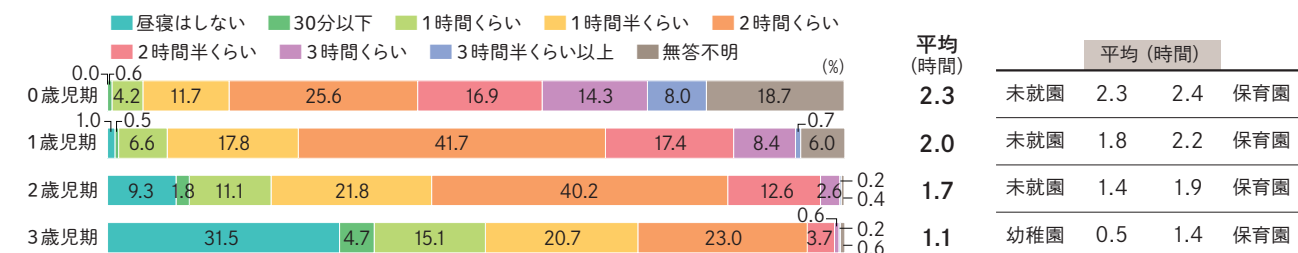
図 1-2-1 起床時刻



※母親の回答 ※「5時半頃以前」は「5時以前」+「5時半頃」、「9時頃以降」は「9時頃」+「9時半頃」+「10時以降」 ※平均時刻は「5時以前」を5時、「5時半頃」を5時30分のように置き換えて算出 ※0歳児期：未就園1,540人、保育園361人、1歳児期：未就園983人、保育園912人、2歳児期：未就園526人、保育園1,024人、3歳児期：幼稚園708人、保育園1,155人

Q 対象のお子様は平日、どれくらい昼寝をしますか。(夜間以外の睡眠を合計してください)

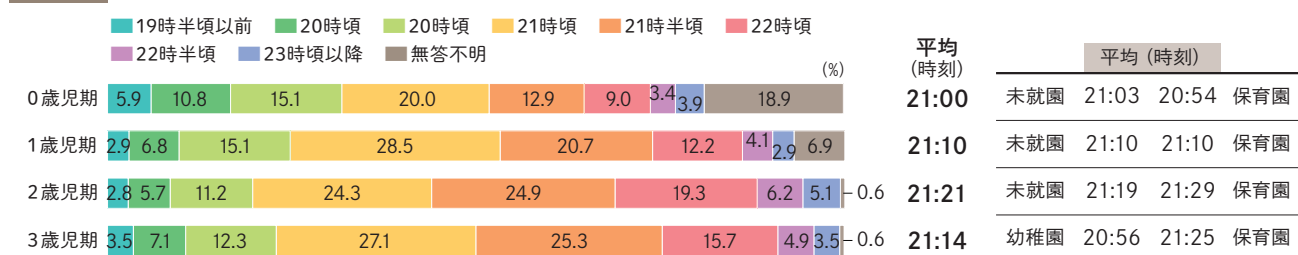
図 1-2-2 昼寝の時間



※母親の回答 ※「3時間半くらい以上」は「3時間半くらい」+「4時間くらい」+「4時間半以上」 ※平均時間は「昼寝はしない」を0時間、「30分以下」を0.5時間、「1時間くらい」を1時間、「4時間半以上」を4.5時間のように置き換えて算出 ※0歳児期：未就園1,540人、保育園361人、1歳児期：未就園983人、保育園912人、2歳児期：未就園526人、保育園1,024人、3歳児期：幼稚園708人、保育園1,155人

Q 対象のお子様は平日の夜、何時頃に寝ますか。

図 1-2-3 就寝時刻



※母親の回答 ※「19時半頃以前」は「18時半頃以前」+「19時頃」+「19時半頃」、「23時頃以降」は「23時頃」+「23時半頃」+「24時以降」 ※平均時刻は「18時半頃以前」を18時、「19時頃」を19時、「19時半頃」を19時30分、「24時以降」は24時のように置き換えて算出 ※0歳児期：未就園1,540人、保育園361人、1歳児期：未就園983人、保育園912人、2歳児期：未就園526人、保育園1,024人、3歳児期：幼稚園708人、保育園1,155人

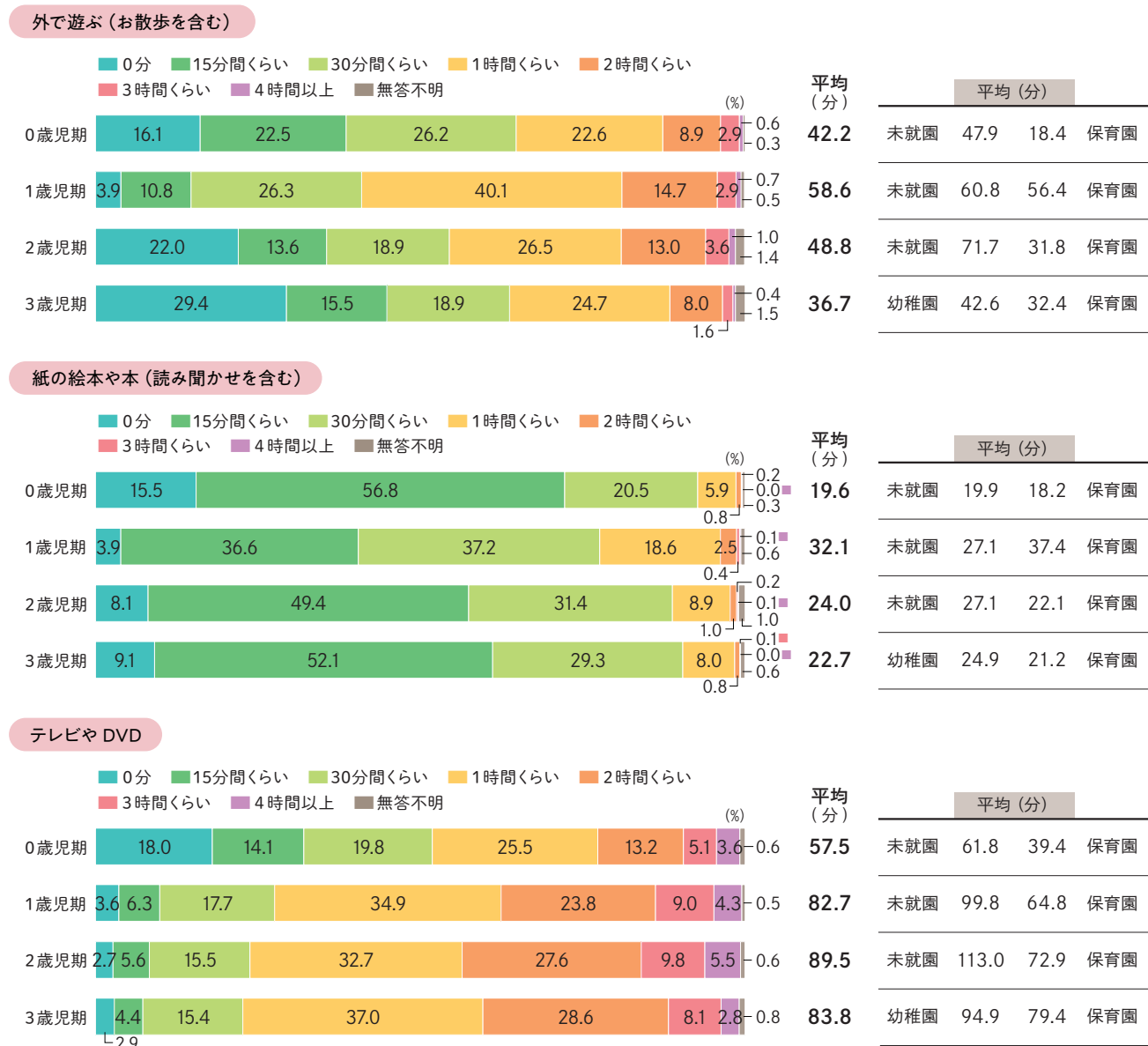
生活時間

3歳児期の29.4%は、平日に(園以外で)外遊びを「しない」。
テレビやDVDの視聴時間は就園状況により大きな違い。

外遊びの時間は1～3歳児期にかけ減少傾向にあり、3歳児期では29.4%が「しない」と回答している。就園別に外遊びの平均時間をみると、0～2歳児期の未就園児は保育園児より長い、3歳児期になるとほとんどの子どもが就園するため外遊びの時間は全体的に減少し、幼稚園児と保育園児の違いもさほど大きくない。絵本の読み聞かせの平均時間は1歳児期にピークを迎えた後やや減少傾向にあり、2～3歳児期は約半数が「15分間くらい」と回答している。また、テレビやDVDの視聴時間は年齢が上がるにつれ「1時間くらい」以上の回答が増加傾向にある。就園別に平均視聴時間をみると保育園児より未就園・幼稚園児が長い。

Q 対象のお子様は、平日に家庭で以下を1日あたりどれくらいの時間、見たり、使ったりしていますか。

図1-3-1 外遊び、読み聞かせ、テレビやDVDを見る時間



※母親の回答 ※平均(分)は「0分」を0分、「15分間くらい」を15分、「30分間くらい」を30分、「1時間くらい」を60分、「2時間くらい」を120分、「3時間くらい」を180分、「4時間以上」を240分に置き換えて算出 ※0歳児期:未就園1,540人、保育園361人、1歳児期:未就園983人、保育園912人、2歳児期:未就園526人、保育園1,024人、3歳児期:幼稚園708人、保育園1,155人

生活時間

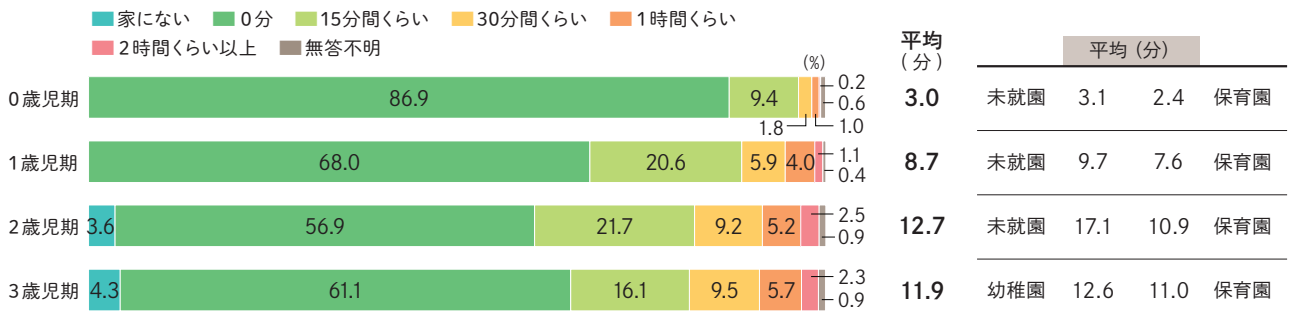
3歳児期の65.4%がスマートフォンを、73.0%がタブレット端末を、87.9%がゲーム機を、まったく利用していない。

スマートフォンの利用時間をみると、「0分」と回答した割合は1歳児期68.0%で0歳児期からは18.9ポイント減少した。「家がない」「0分」と回答した割合は2歳児期60.5%、3歳児期65.4%であることから、いずれの年齢でも約6割は子どもにまったく見せていないようだ。一方、タブレットの利用時間は年齢が上がるにつれ増加傾向にある。ゲーム機の利用時間は2～3歳児期にかけてわずかに増加するものの、いずれの年齢でも約9割が「家がない」「0分」と回答している。いずれの電子メディアにおいても、就園状況による利用時間の違いはほぼみられない。

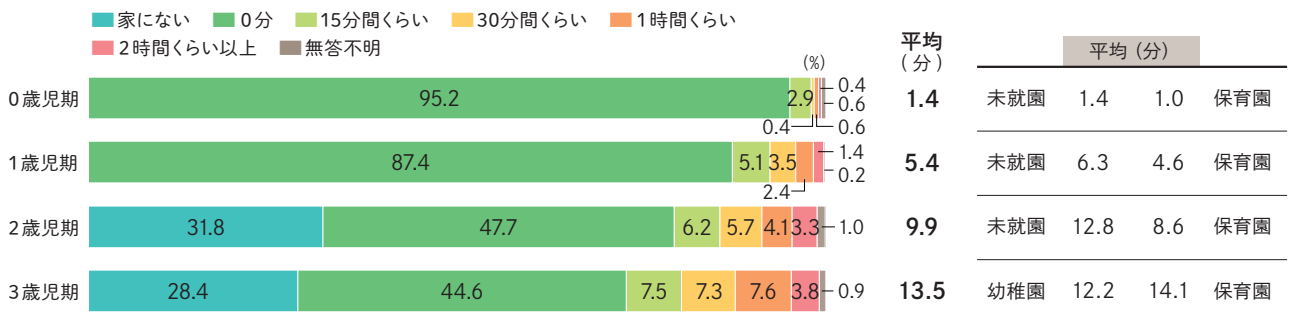
Q 対象のお子様は、平日に家庭で以下を1日あたりどれくらいの時間、見たり、使ったりしていますか。

図 1-3-2 スマートフォン、タブレット端末、ゲーム機を利用する時間

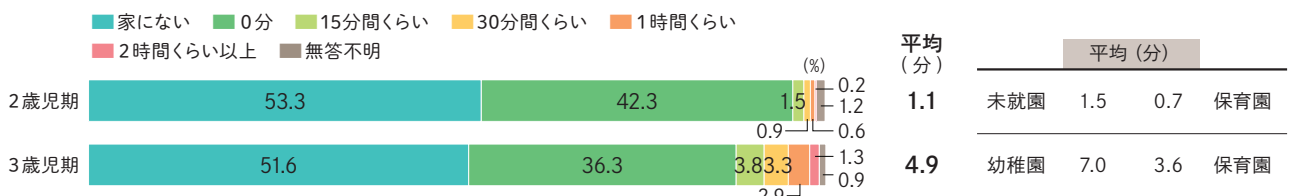
スマートフォン



タブレット端末



ゲーム機



※母親の回答 ※「家がない」は2～3歳児期のみ ※「2時間くらい以上」は「2時間くらい」+「3時間くらい」+「4時間以上」 ※平均 (分) は「0分」を0分、「15分間くらい」を15分、「30分間くらい」を30分、「1時間くらい」を60分、「2時間くらい」を120分、「3時間くらい」を180分、「4時間以上」を240分に置き換えて算出 ※0歳児期：未就園1,540人、保育園361人、1歳児期：未就園983人、保育園912人、2歳児期：未就園526人、保育園1,024人、3歳児期：幼稚園708人、保育園1,155人

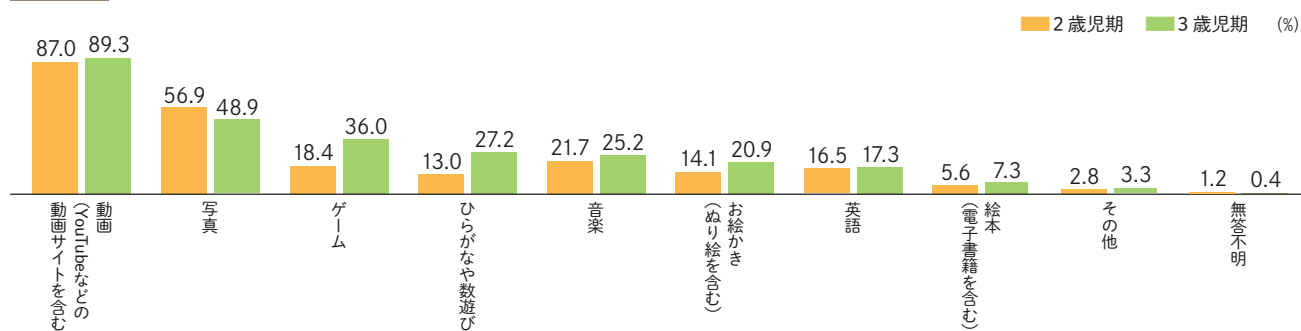
デジタルメディア

2～3歳児期にかけて子どもがメディアを利用する場面が拡がり、
家庭内で設定するルールが増加。

利用するアプリやソフトの種類をみると、「動画」が2歳児期 87.0%、3歳児期 89.3%でもっとも多い。とくに2～3歳児期にかけて「ゲーム」17.6ポイント、「ひらがなや数遊び」14.2ポイントの増加がみられる（図1-4-1）。利用させる理由として、「子どもが使いたがるから」が2歳児期 70.1%、3歳児期 74.2%でもっとも多い。また2～3歳児期にかけて、「公共の場所で子どもが騒がないようにするため」が減少する一方、「子どもが楽しめるから」は増加する（図1-4-2）。利用時の家庭内でのルールについて、時間や方法、使い方に関する項目が2～3歳児期にかけて増加し、子どもの成長にしたがってルールが設定されていく様子がわかる（図1-4-3）。

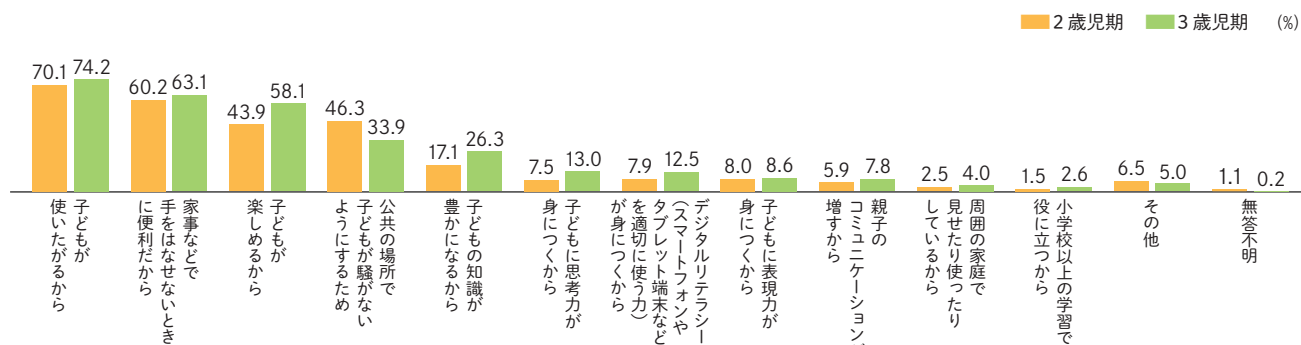
Q 対象のお子様のデジタルメディア（スマートフォンやタブレット端末。テレビと接続する場合も含む）の利用についてお聞きます。

図 1-4-1 利用アプリやソフトの種類



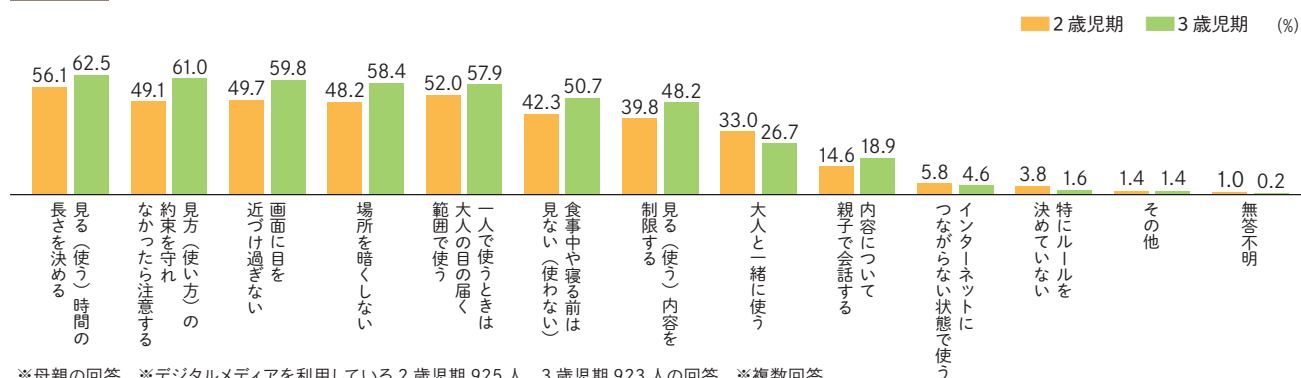
※母親の回答 ※デジタルメディアを利用している2歳児期925人、3歳児期923人の回答 ※複数回答

図 1-4-2 利用させる理由



※母親の回答 ※デジタルメディアを利用している2歳児期925人、3歳児期923人の回答 ※複数回答

図 1-4-3 利用時の使い方やルール



※母親の回答 ※デジタルメディアを利用している2歳児期925人、3歳児期923人の回答 ※複数回答

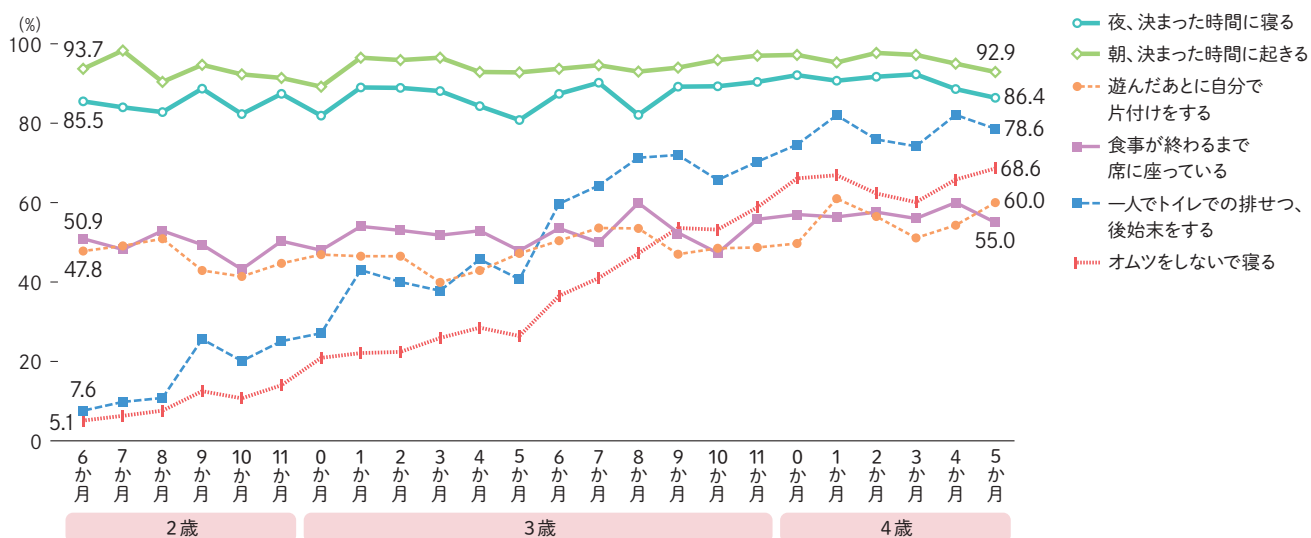
生活習慣

「食事が終わるまで席に座っている」「遊んだあとに自分で片付けをする」ができる子どもは約5割。2歳6か月から4歳5か月にかけて大きな変化はみられず、ほぼ横ばい。

図1-5-1で、2歳6か月から4歳5か月にかけての生活習慣の定着をみる。2歳6か月で「夜、決まった時間に寝る」「朝、決まった時間に起きる」は約9割が、「食事が終わるまで席に座っている」「遊んだあとに自分で片付けをする」は約5割が「とても+まああてはまる」と回答しているが、4歳5か月にかけて大きな変化はみられずほぼ横ばいである。一方で「一人でトイレでの排せつ、後始末をする」「オムツをしないで寝る」は2歳6か月でほとんどができないが、4歳5か月では約7割ができている。図1-5-2では3歳6か月から4歳5か月にかけて、衣服の着脱や衛生の習慣がゆるやかに定着していく様子が見える。

Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。（おうちの方に言われればできる場合を含めてお答えください）

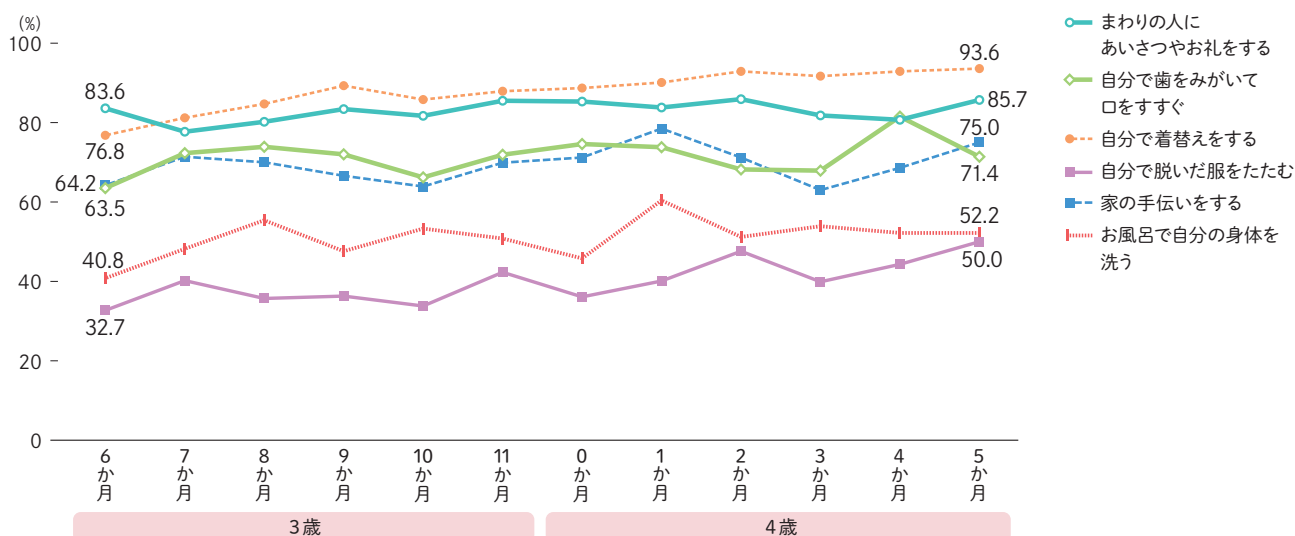
図1-5-1 生活習慣（2～3歳児期、月齢別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

※2歳6か月～3歳5か月は2歳児期、3歳6か月～4歳5か月は3歳児期

図1-5-2 生活習慣（3歳児期、月齢別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

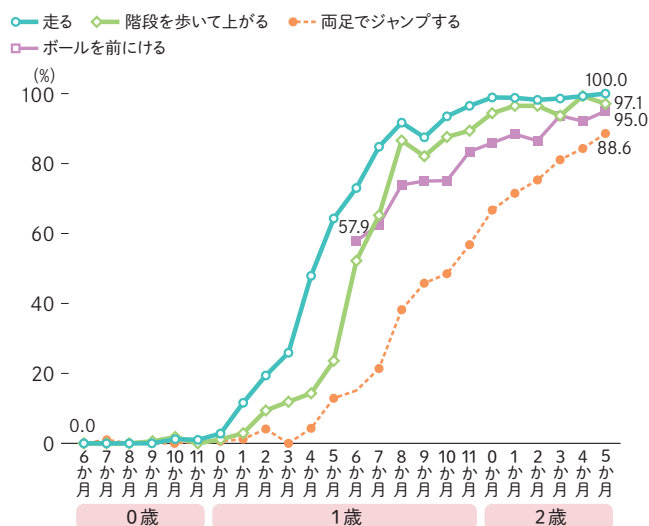
運動発達

粗大運動、微細運動ともに、
2歳6か月から4歳5か月にかけて徐々に発達。

1歳前にはほとんどできなかった「走る」「階段を歩いて上がる」「両足でジャンプする」は、2歳にかけて飛躍的に「できる」割合が高まる（図1-6-1）。また、2歳6か月で「できる」割合は、「でんぐり返しをする」41.5%、「片足とび（ケンケン）をする」23.9%でばらつきがあるが、4歳5か月ではいずれも約9割ができるようになっている（図1-6-2）。1歳後半以降、運筆や積み木並べ、手洗いが「できる」割合が高まる（図1-6-3）。また2歳6か月で「できる」割合は、「ボタンをはめる」20.1%、「見本をまねて「十」の字を書く」15.7%、「直線にそってはさみで紙を切る」7.5%と1～2割だったものが、4歳5か月では約8～9割が「できる」と回答している（図1-6-4）。

Q 対象のお子様について、できることすべてに○をつけてください。

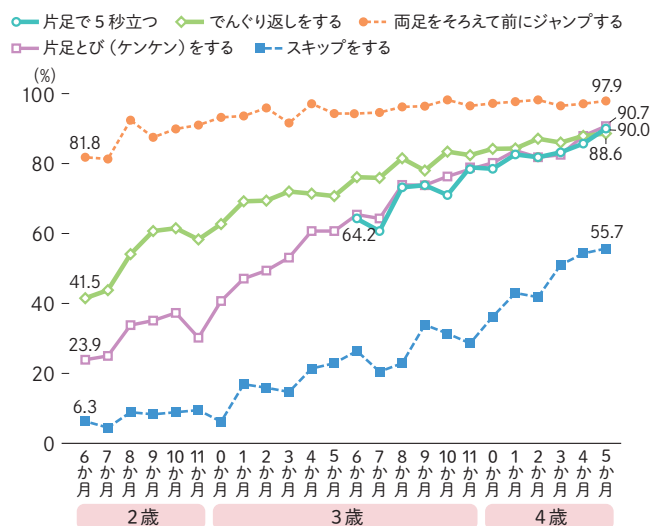
図1-6-1 粗大運動（0～1歳児期、月齢別）



※「できる」 ※母親の回答

※ 0歳6か月～1歳5か月は0歳児期、1歳6か月～2歳5か月は1歳児期

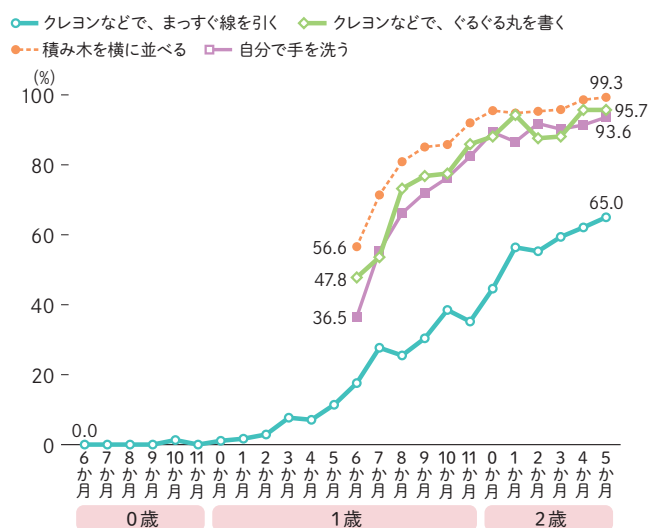
図1-6-2 粗大運動（2～3歳児期、月齢別）



※「できる」 ※母親の回答

※ 2歳6か月～3歳5か月は2歳児期、3歳6か月～4歳5か月は3歳児期

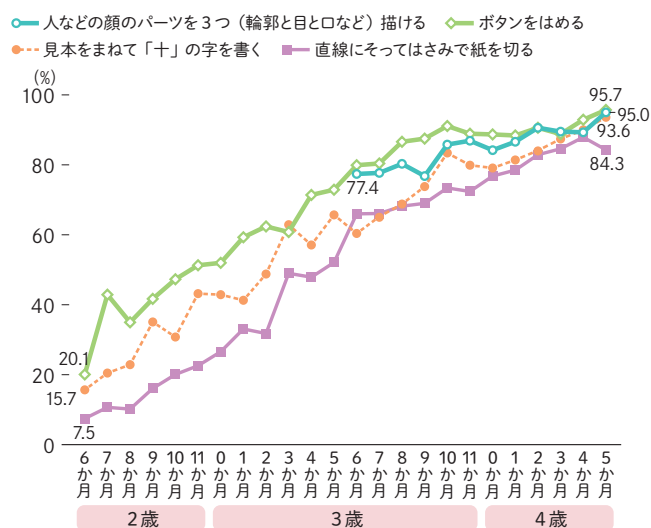
図1-6-3 微細運動（0～1歳児期、月齢別）



※「できる」 ※母親の回答

※ 0歳6か月～1歳5か月は0歳児期、1歳6か月～2歳5か月は1歳児期

図1-6-4 微細運動（2～3歳児期、月齢別）



※「できる」 ※母親の回答

※ 2歳6か月～3歳5か月は2歳児期、3歳6か月～4歳5か月は3歳児期

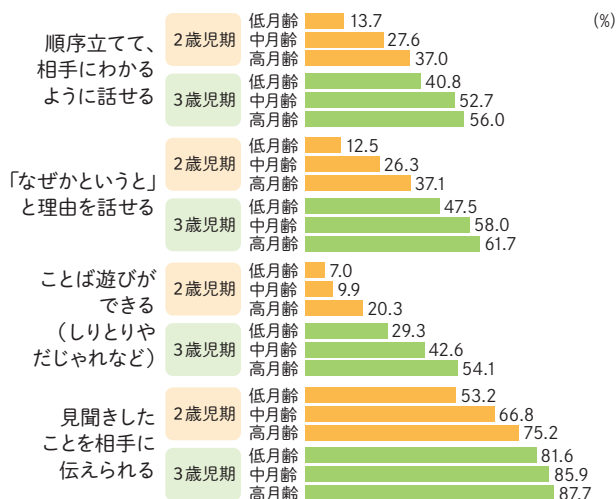
認知発達

2～3歳児期にかけて、 言葉、文字、数の認知能力はめざましい発達をとげる。

2～3歳児期の言葉の発達に関して、いずれの項目も、2歳児期低月齢から3歳児期高月齢にかけて30～40ポイント以上増加している（図1-7-1）。同様に文字、数の発達をみると、言葉ほどではないもののいずれの項目も2歳児期低月齢から3歳児期高月齢にかけて伸びている（図1-7-2～3）。この時期の言葉、文字、数の発達が著しいことがわかる。一方、2～3歳児期の分類の項目をみると月齢にしたがって「とても+まああてはまる」が増加傾向にあるものの、「物の色（赤、青、緑、黄など）を言える」は82.7%といったように、2歳児期低月齢の時点ですでにできる割合がいずれも半数を超えている（図1-7-4）。

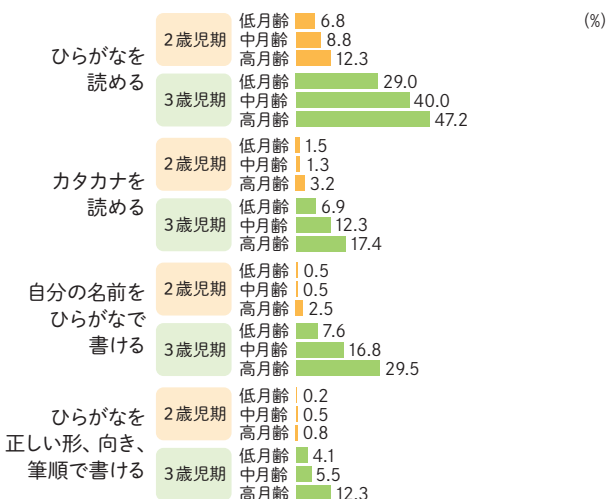
Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図1-7-1 言葉（2～3歳児期、月齢別）



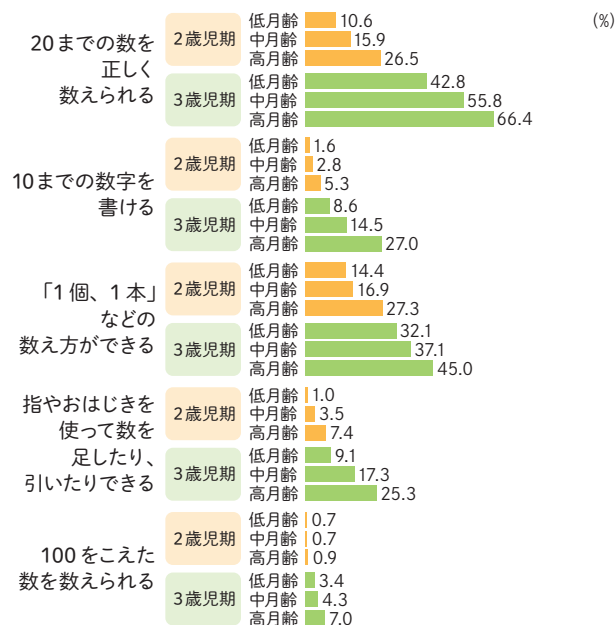
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

図1-7-2 文字（2～3歳児期、月齢別）



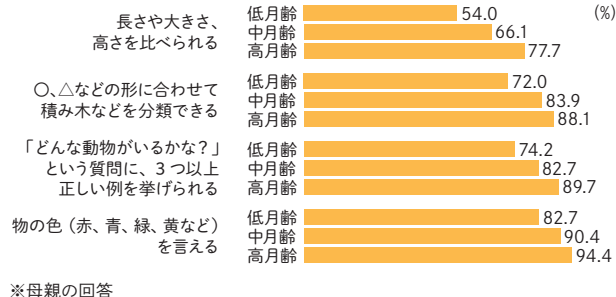
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

図1-7-3 数（2～3歳児期、月齢別）



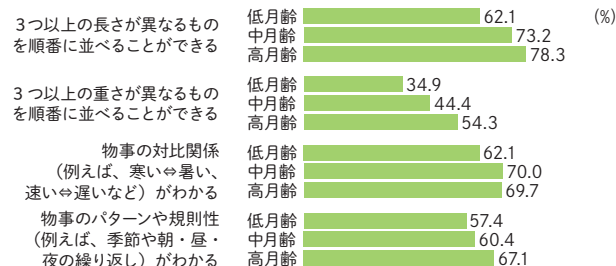
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

図1-7-4 分類（2歳児期、月齢別）



※母親の回答

図1-7-5 分類（3歳児期、月齢別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

※2歳児期の低月齢：2歳6か月～9か月、中月齢：2歳10か月～3歳1か月、高月齢：3歳2か月～5か月、3歳児期の低月齢：3歳6か月～9か月、中月齢：3歳10か月～4歳1か月、高月齢：4歳2か月～5か月

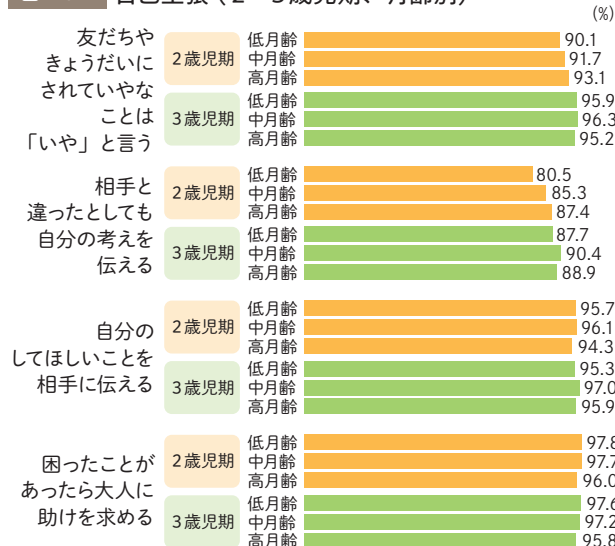
社会情動的発達

**2～3歳児期にかけて、自己主張、自己抑制、協調性、頑張る力は発達。
とくに自己抑制の伸びは大きい。**

自己主張はいずれの項目も、2歳児期低月齢で8割以上が「とても+まああてはまる」と回答しており、さらに3歳児期高月齢にかけてゆるやかな増加傾向にある（図1-8-1）。自己抑制、協調性の発達をみると、いずれの項目も2歳児期低月齢から3歳児期高月齢にかけて増加している（図1-8-2～3）。とくに自己抑制の項目は、2歳児期低月齢から3歳児期高月齢にかけて15～20ポイント以上の増加がみられ、この時期の発達が大きいことがわかる。頑張る力のほとんどの項目は月齢にしたがってゆるやかな増加傾向にあるものの、「うまくいかなくてもあきらめずに取り組む」には月齢による変化があまりみられない（図1-8-4）。

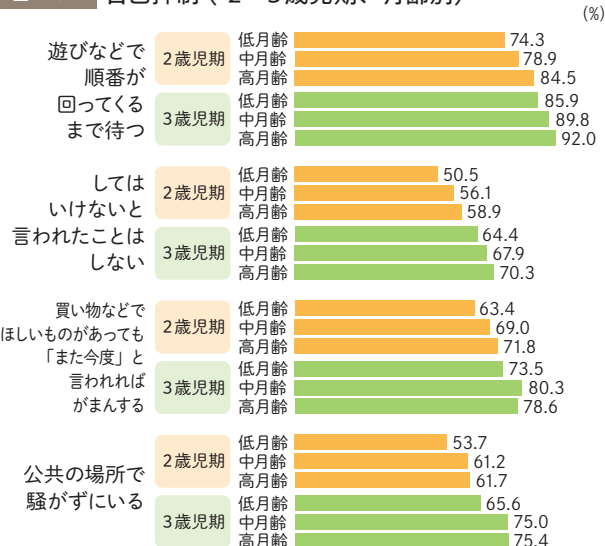
Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図1-8-1 自己主張（2～3歳児期、月齢別）



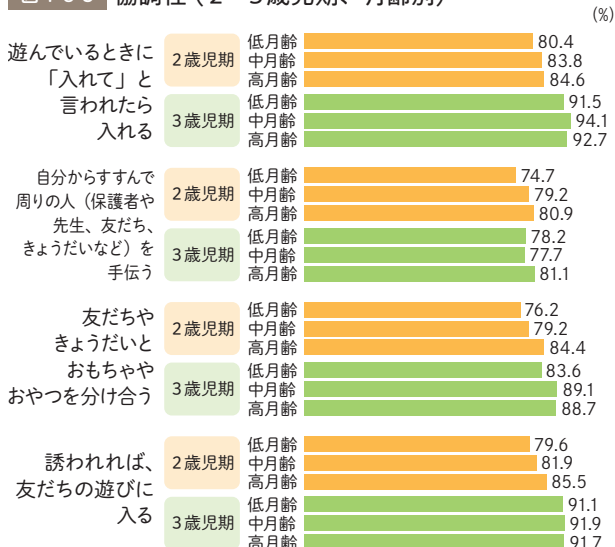
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

図1-8-2 自己抑制（2～3歳児期、月齢別）



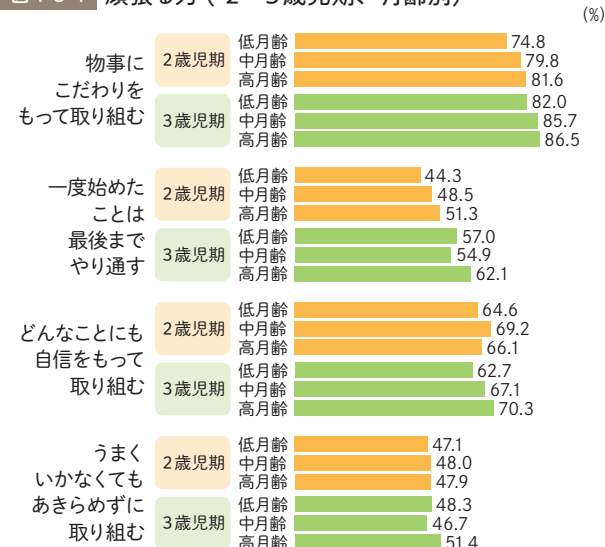
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

図1-8-3 協調性（2～3歳児期、月齢別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

図1-8-4 頑張る力（2～3歳児期、月齢別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

※2歳児期の低月齢：2歳6か月～9か月、中月齢：2歳10か月～3歳1か月、高月齢：3歳2か月～5か月、3歳児期の低月齢：3歳6か月～9か月、中月齢：3歳10か月～4歳1か月、高月齢：4歳2か月～5か月

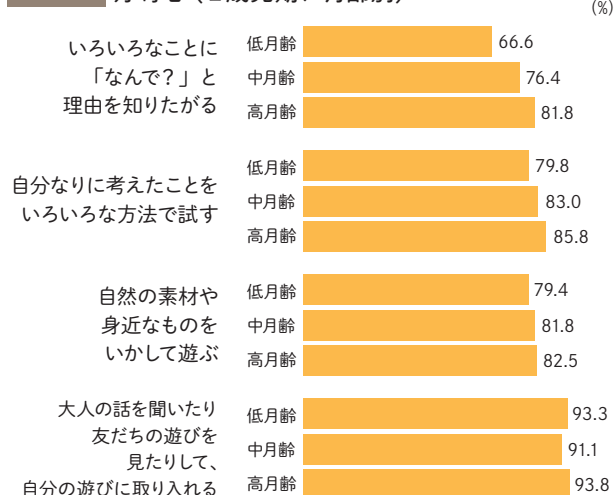
社会情動的発達

2歳児期、3歳児期は、 好奇心、積極性の発達がゆるやか。

2歳児期の好奇心についてほとんどの項目は低月齢の時点から約8～9割が「とても+まああてはまる」と回答しており、高月齢にかけての伸びがゆるやかな傾向にあるが、「いろいろなことに『なんで?』と理由を知りたがる」は低月齢から高月齢にかけて15.2ポイントも増加している（図1-8-5）。3歳児期の「拡散的好奇心」は「とても+まああてはまる」の割合が約7～8割であるものの、「特殊的好奇心」は約2～5割と低く、遅れて発達することがうかがえる（図1-8-6）。どちらも月齢にしたがって伸びはゆるやかである。3歳児期の積極性の項目は、「とても+まああてはまる」の割合がゆるやかに増加している（図1-8-7）。

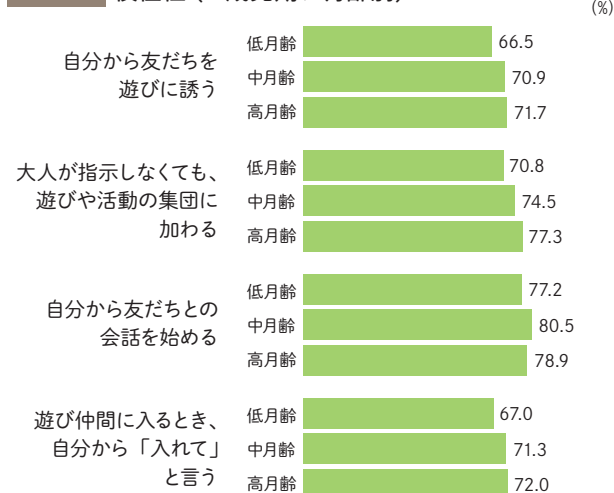
Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図1-8-5 好奇心（2歳児期、月齢別）



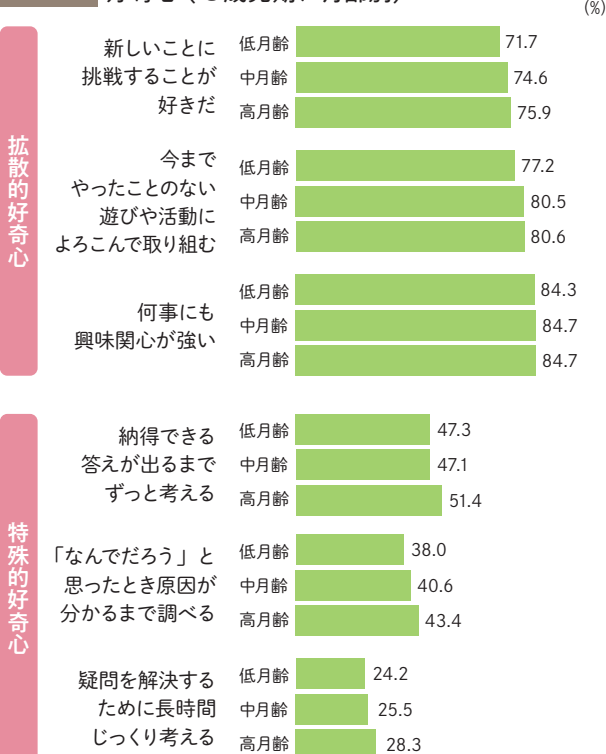
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

図1-8-7 積極性（3歳児期、月齢別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

図1-8-6 好奇心（3歳児期、月齢別）



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答
※西川・雨宮（2015）を幼児用に一部改変



※2歳児期の低月齢：2歳6か月～9か月、中月齢：2歳10か月～3歳1か月、高月齢：3歳2か月～5か月、3歳児期の低月齢：3歳6か月～9か月、中月齢：3歳10か月～4歳1か月、高月齢：4歳2か月～5か月

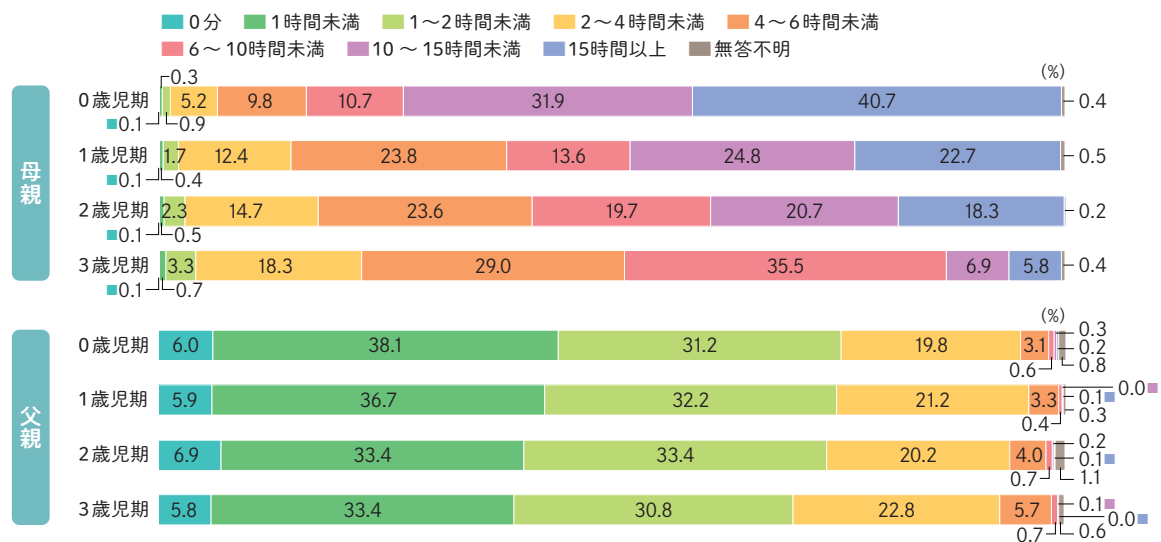
夫婦の子育て

母親の平日の子育て時間は0～3歳児期にかけて大きく変化するも、父親の変化はほとんどみられず。子育ての分担比率は、母親が「8～9割」である家庭がもっとも多い。

図2-1-1の平日の子育て時間について、子どもが成長するにつれ、10時間以上と回答した母親は大きく減少している。一方、父親の回答には子どもの年齢による変化はほとんどみられず、いずれの年齢でも約4割が「0分」「1時間未満」と回答している。配偶者との子育ての分担比率をみると、0歳児期は約6割の母親が「8～9割」と回答するが、子どもが成長するにつれて「5割」「6～7割」が増加している（図2-1-2）。父親の子育て分担比率は、子どもの年齢にかかわらず「1～2割」という回答がもっとも多いが、0～3歳児期にかけて「3～4割」「5割」が増えている。

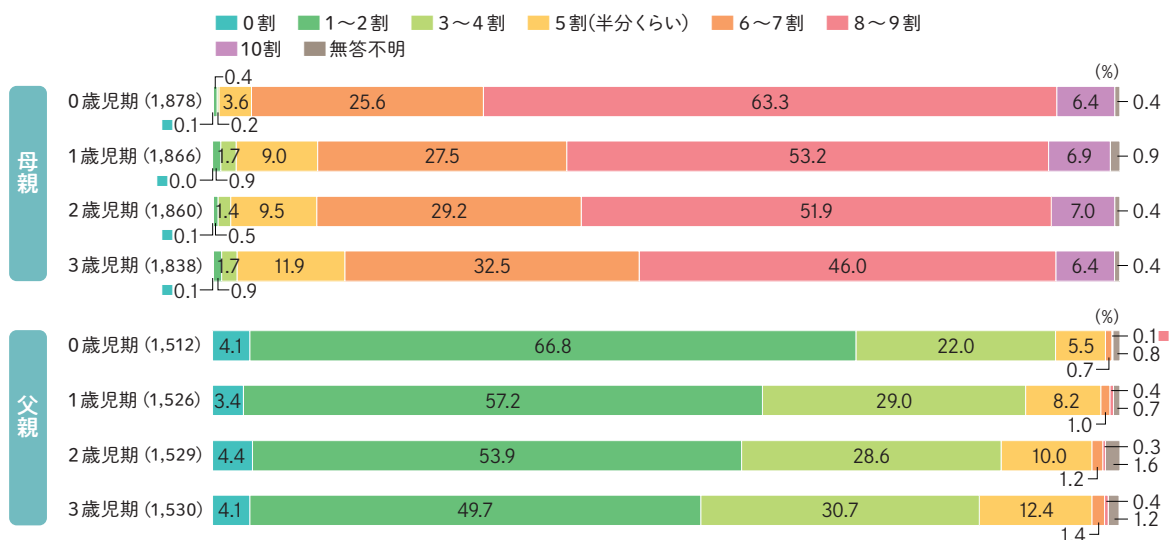
Q 以下にあげる時間は、1日あたり平均してどれくらいですか。子育て時間は、あなたが対象のお子様と一緒に過ごす時間（睡眠時間は除く）をお答えください。

図2-1-1 平日の子育て時間



Q あなたと配偶者の子育て・家事の分担のうち、あなたが分担している割合はどれくらいですか。

図2-1-2 子育ての分担比率



※有配偶者の回答

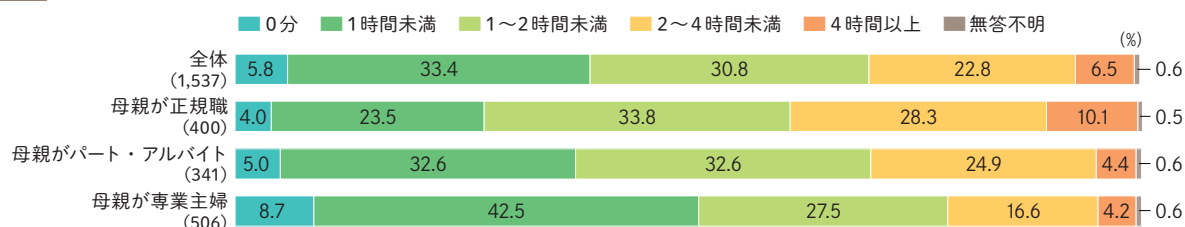
父親の子育て

母親が正規職の場合、母親がパート・アルバイトや専業主婦の場合よりも、父親の子育て時間は長い。

母親の就労状況別にみた3歳児期の父親の平日の子育て時間について、1時間以上と回答した割合は、母親が正規職の場合72.2%、専業主婦の場合48.3%で23.9ポイントの差がある（図2-2-1）。休日の子育て時間について、2時間以上と回答した割合は母親が正規職の場合がもっとも多く、専業主婦とパート・アルバイトの間に差はほとんどない（図2-2-2）。在宅勤務の日数別に父親の平日の子育て時間をみると、在宅勤務が「まったくない」「週1～2日」と比べて「週3～7日」「不定期」の場合は2時間以上と回答した割合が高い（図2-2-3）。平日の家事時間は、在宅勤務が「まったくない」や「週1～2日」と比べて「週3～7日」や「不定期」の場合、1時間以上と回答した割合が高い（図2-2-4）。

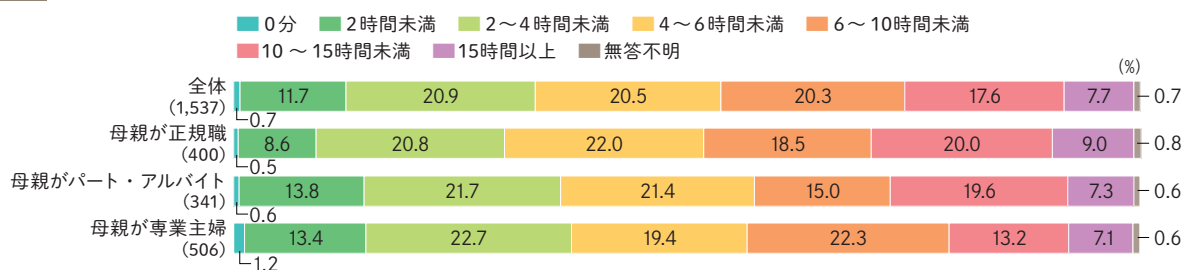
Q 以下にあげる時間は、1日あたり平均してどれくらいですか。子育て時間は、あなたが対象のお子様と一緒に過ごす時間（睡眠時間は除く）をお答えください。

図2-2-1 父親の平日の子育て時間（3歳児期、母親の就労状況別）



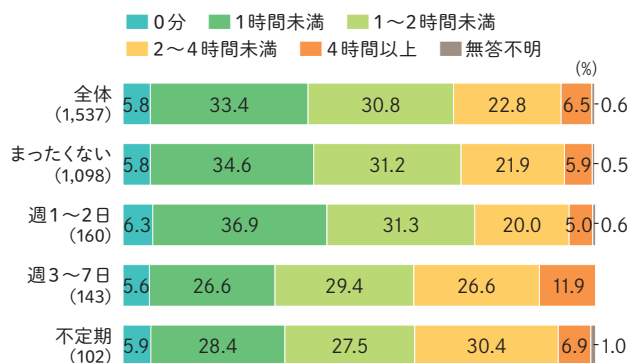
※母親の就労状況は母親の回答 ※「正規職」は「正社員・正職員」 ※「4時間以上」は「4～6時間未満」+「6～10時間未満」+「10～15時間未満」+「15時間以上」

図2-2-2 父親の休日の子育て時間（3歳児期、母親の就労状況別）



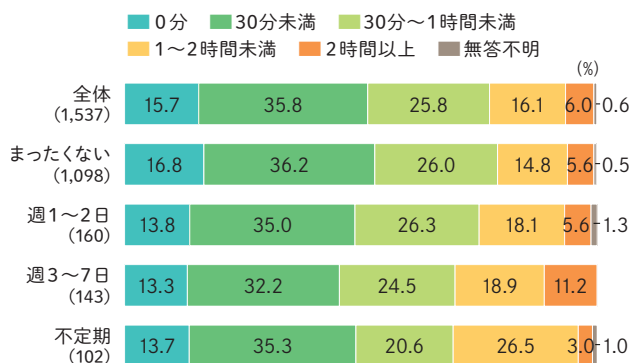
※母親の就労状況は母親の回答 ※「正規職」は「正社員・正職員」 ※「2時間未満」は「1時間未満」+「1～2時間未満」

図2-2-3 父親の平日の子育て時間（3歳児期、在宅勤務の日数別）



※「4時間以上」は「4～6時間未満」+「6～10時間未満」+「10～15時間未満」+「15時間以上」

図2-2-4 父親の平日の家事時間（3歳児期、在宅勤務の日数別）



※「2時間以上」は「2～4時間未満」+「4～6時間未満」

母親・父親の子育てに対する意識

母親・父親ともに約9割が「家事や育児を夫婦で分担して行うのは当然だ」と考える一方で、4割以上が「子どもが小さいうちは、母親は子育てに専念するほうがよい」とも考えている。

母親・父親ともに約9割が「家事や育児を夫婦で分担して行うのは当然だ」と考えており、年代による差はない（図2-3-1）。「子育てをしない男性は父親とは呼べないと思う」は母親65.4%、父親57.4%で母親のほうが8ポイント高く、年代別にみると若い母親ほど、この考えを肯定している（図2-3-2）。一方、「男性は外で働き、女性は家庭を守るのがよい」は母親15.2%、父親29.9%で、父親のほうが肯定していることがわかる（図2-3-3）。また「子どもが小さいうちは、母親は子育てに専念するほうがよい」は母親42.2%、父親49.0%、「家族を経済的に養うのは父親の役割だと思う」は母親46.8%、父親72.0%で、いずれも父親のほうが肯定しており、年代による差はない（図2-3-4～5）。

Q 対象のお子様の子育てについてのあなたのお考えとして、以下はどれくらいあてはまりますか。

図2-3-1 家事や育児を夫婦で分担して行うのは当然だ
(3歳児期、年代別、母親の就労状況別)

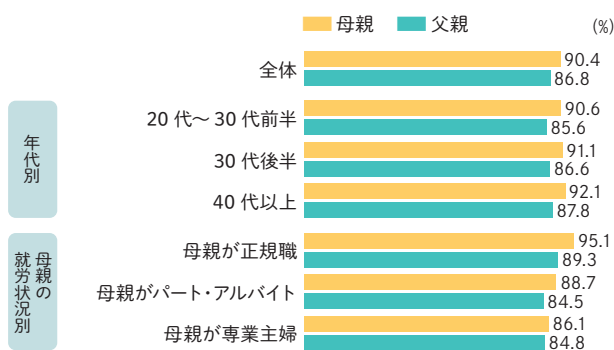


図2-3-2 子育てをしない男性は父親とは呼べないと思う
(3歳児期、年代別、母親の就労状況別)

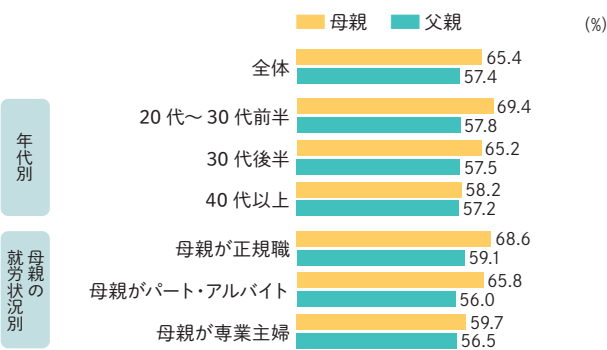


図2-3-3 男性は外で働き、女性は家庭を守るのがよい
(3歳児期、年代別、母親の就労状況別)

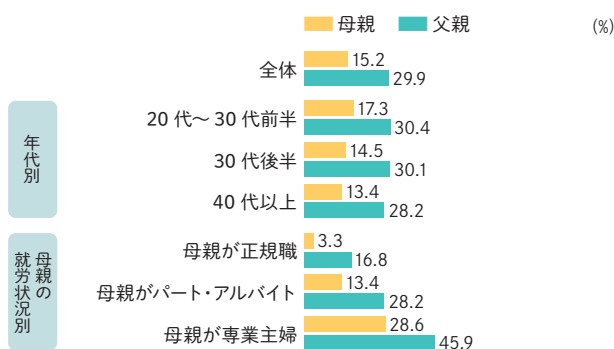


図2-3-4 子どもが小さいうちは、母親は子育てに専念するほうがよい
(3歳児期、年代別、母親の就労状況別)

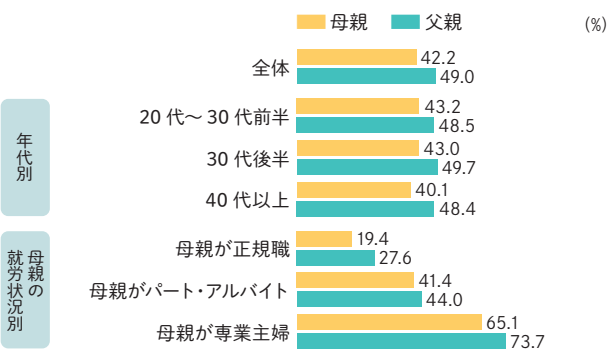
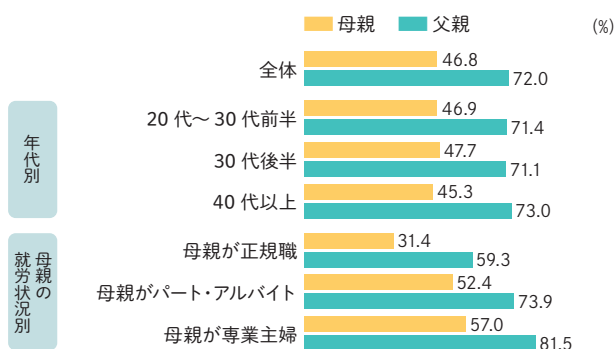


図2-3-5 家族を経済的に養うのは父親の役割だと思う
(3歳児期、年代別、母親の就労状況別)



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」

※母親の就労状況は母親の回答

※「20代～30代前半」：母親713人、父親431人、「30代後半」：母親740人、父親545人、「40代以上」：母親409人、父親540人の回答

※「母親が正規職」：母親513人、父親400人、「母親がパート・アルバイト」：母親425人、父親341人、「母親が専業主婦」：母親611人、父親506人の回答

母親・父親の働き方

子どもの成長につれて就労している母親は増加し、3歳児期で 57.6% の母親が就労。
父親の約半数は、週あたりの労働時間が 50 時間以上。

子どもの成長につれて就労している母親は増加している（図 2-4-1）。0～1 歳児期にかけて「休職中」「無職（専業主婦）」が減少し、大きな変化がみられる。3 歳児期では 57.6% の母親が就労している。母親の労働時間は 0～1 歳児期にかけて「15 時間未満」が減り、「40～50 時間未満」が増えており、3 歳児期には「15～30 時間未満」と「30～40 時間未満」が約 3 割ずつである（図 2-4-2）。父親の労働時間は 0～2 歳児期には約半数が 50 時間以上であるが、3 歳児期には 50 時間以上の割合が減少している（図 2-4-2）。帰宅時間について、母親・父親ともに 0～2 歳児期にかけて大きな変化はみられないが、3 歳児期には全体的に帰宅時間が早まっていることがわかる（図 2-4-3）。

Q あなたご自身についてうかがいます。

図 2-4-1 母親の就労状況

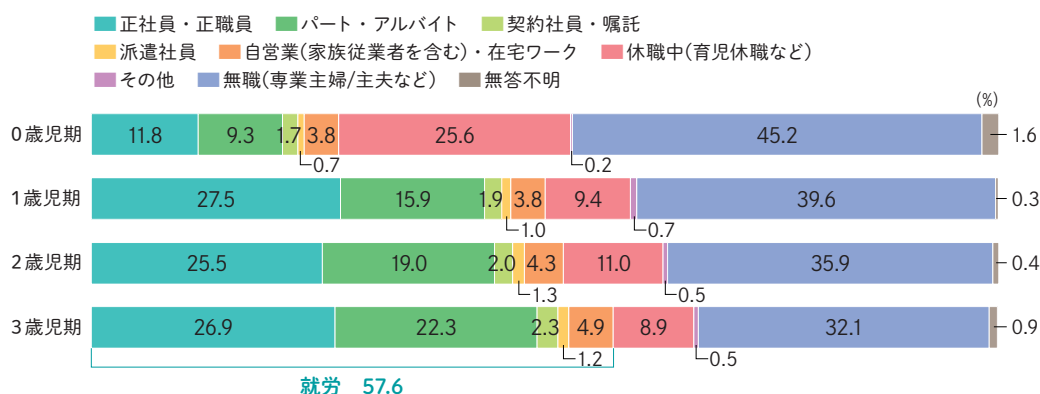
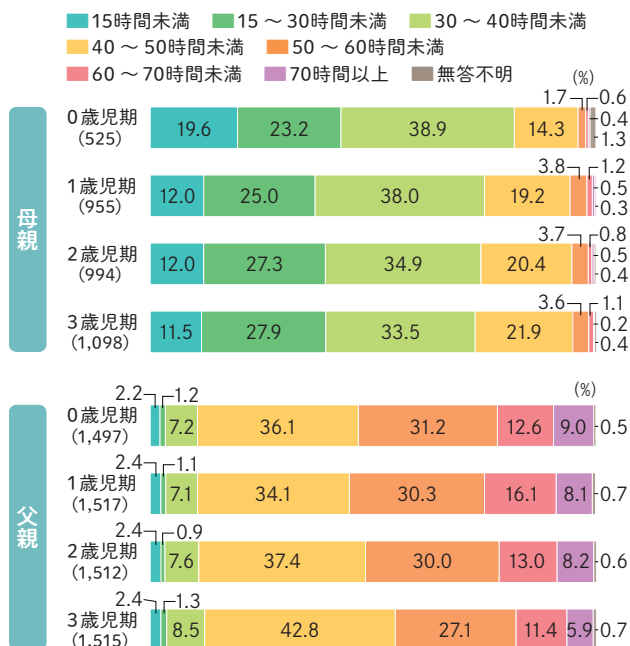
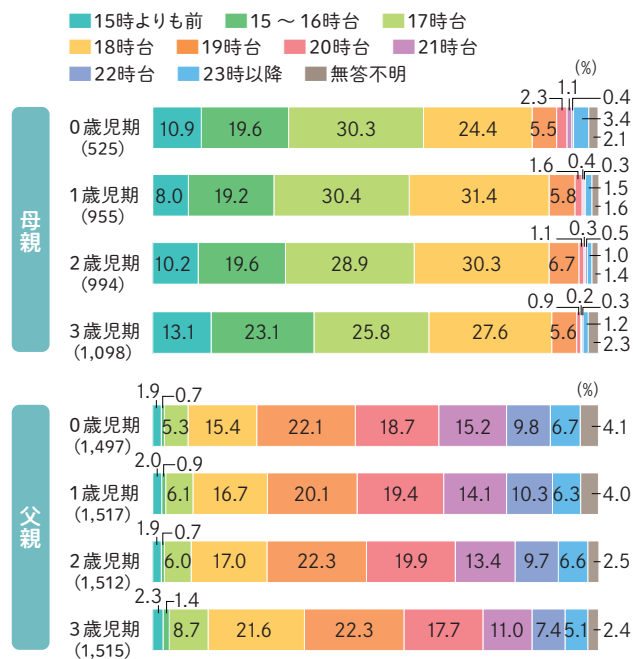


図 2-4-2 週あたりの労働時間（有職者）



※有職者の回答

図 2-4-3 仕事がある日の帰宅時間（有職者）



※有職者の回答

3 新型コロナウイルス感染症と親子の生活

2020年に世界的に流行した新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）は、親子の生活に大きな影響を及ぼしました。ここでは母親・父親の職場環境や制度、在宅勤務について、コロナ以前（0～2歳児期）と以後（3歳児期）を比較するとともに、緊急事態宣言が発出されていた2020年4～5月頃の子どもの生活や様子について見ていきます。

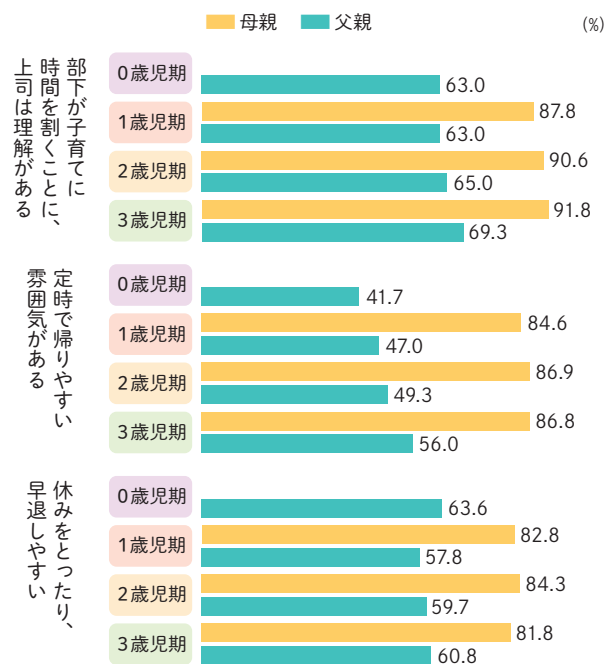
母親・父親の働く環境

**父親の職場より母親の職場のほうが、子育てに対する理解が大きい。
在宅勤務の制度は、新型コロナウイルス感染症の流行後に増加。**

母親・父親の職場環境をみると、いずれの項目も父親より母親のほうが「とても＋まああてはまる」と回答した割合が高く、子育てに対して職場から理解を得ていることがわかる（図3-1-1）。またコロナ以前（0～2歳児期）と比べてコロナ以後（3歳児期）は、「定時で帰りやすい雰囲気がある」と回答した父親が増えている。母親・父親の職場制度について、コロナ以前（1歳児期）と以後（3歳児期）を比較して、母親・父親ともに在宅勤務の制度があり、利用したことがあると回答した割合が増えている（図3-1-2）。一方、在宅勤務の状況をみると、7割強の母親・父親は「まったくない」と回答しており、まだ利用の実態は少ないことがわかる（図3-1-3）。

Q あなたの職場では、以下についてどれくらいあてはまりますか。

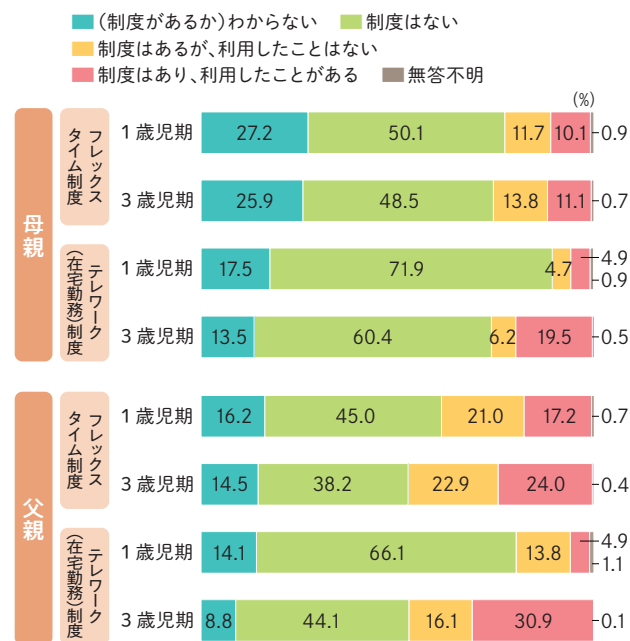
図3-1-1 職場環境（有職者）



※「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」 ※有職者の回答
※0歳児期は父親のみに聴取

Q あなたの職場では、以下の制度や活動はありますか。またある場合、利用したことがありますか。

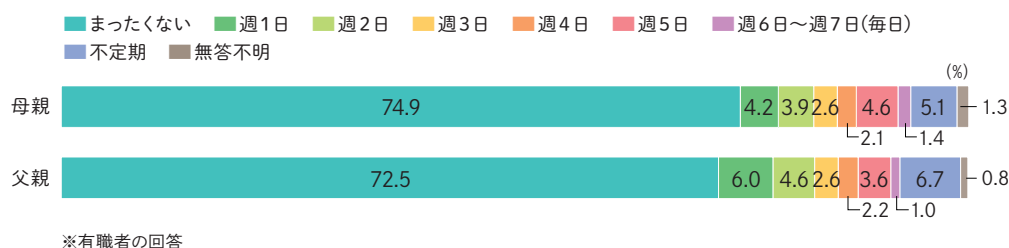
図3-1-2 職場制度（有職者）



※有職者の回答

Q あなたご自身についてうかがいます。

図3-1-3 在宅勤務状況（3歳児期、週あたりの出勤せず、自宅（在宅）で仕事をする日数、有職者）



※有職者の回答

※0歳児期：母親 525 人、父親 1,497 人、1歳児期：母親 955 人、父親 1,517 人、2歳児期：母親 994 人、父親 1,512 人、3歳児期：母親 1,098 人、父親 1,515 人の回答

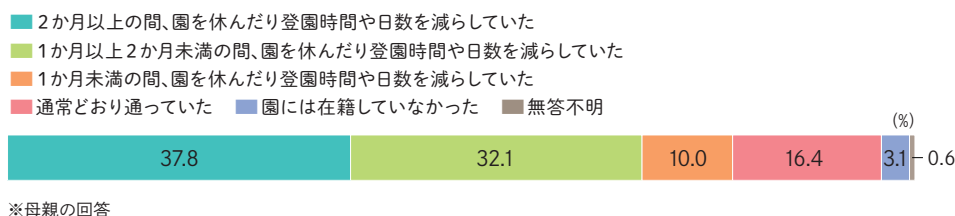
子どもの生活や様子

緊急事態宣言中に園を休んだり 登園時間や日数を減らした子どもは 79.9%。

緊急事態宣言が発出されていた 2020 年 4～5 月頃に、79.9% の家庭で園を休んだり登園時間や日数を減らしていた（図 3-2-1）。休園あるいは登園を自粛していた人に休園時の園の対応をたずねたところ、「家庭でできる遊びの情報発信があった」が 42.6% ともっとも多く、次いで「日々の過ごし方の情報発信があった」が 41.7% だった（図 3-2-2）。子どもの様子について、「規則正しく毎日を過ごした」が 85.4%、「しっかり運動した」が 57.4% と休園や外出自粛の中でも生活リズムを崩さないように工夫していたことがわかる（図 3-2-3）。テレビや DVD の視聴時間は 1 日平均 121.4 分と 2 歳児期と比べ長くなってはいたが、3 歳児期の 9 月には 2 歳児期と同様の視聴時間まで下がっている（図 3-2-4）。

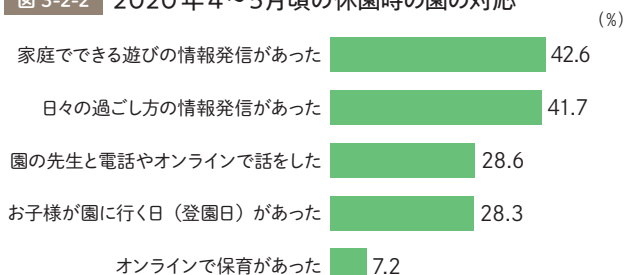
Q 新型コロナウイルス感染症の流行により、園を休んだり、登園時間や日数を減らしたりしていた時期はありますか（休園や登園自粛を含む）。

図 3-2-1 2020 年 4～5 月頃の休園状況



Q 休園のときの園の状況や対応について、次のようなことはどれくらいありましたか。

図 3-2-2 2020 年 4～5 月頃の休園時の園の対応



※「園を休んだり、登園時間や日数を減らしていた」と回答した母親 1,521 人の回答

Q 4～5 月頃の対象のお子様の生活や様子について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

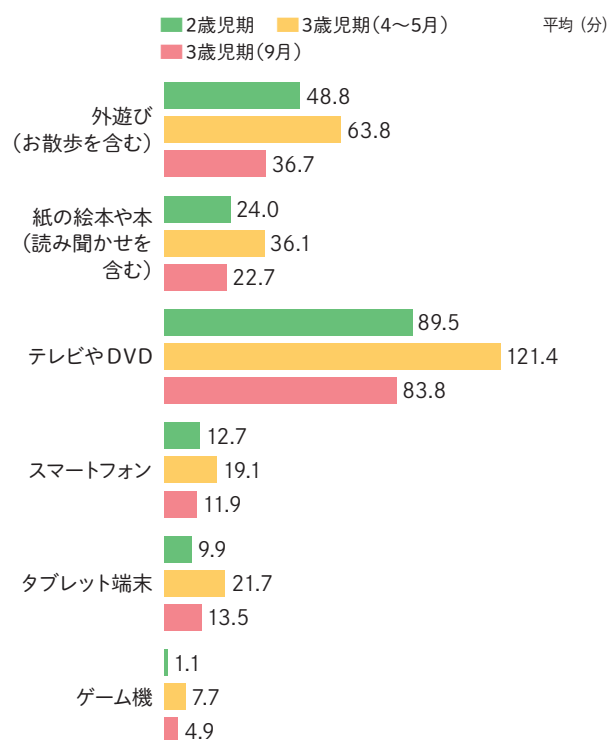
図 3-2-3 2020 年 4～5 月頃の子どもの様子



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※母親の回答

Q 4～5 月頃の対象のお子様は、平日に家庭で以下を 1 日あたりどれくらいの時間、見たり使ったりしていましたか。

図 3-2-4 2020 年 4～5 月頃の生活時間
（2 歳児期、3 歳児期（9 月）との比較）



養育行動とアタッチメント形成

乳児期から幼児期にかけて、
子どもの成長とともに親の養育行動も変化。

親の養育行動は、温かい関わりを土台に、乳児期には応答的なケア行動が多く、幼児期にかけて教育的な関わりが増えていく（図4-1-1～5）。例えば、温かい養育行動である「抱きしめたりくすぐるなど、スキンシップをとる」は0歳児期から2歳児期まで母親・父親ともに「よく+ときどきする」の割合が高い。一方、「子どもが求めることに応える」といった子どもに敏感に反応する養育行動は、乳児期の0～1歳児期と比べ、2歳児期に「よくする」が減少し、「ときどきする」が増加している。

Q あなたは日頃、対象のお子様と（またはお子様に）以下のことをどれくらいしていますか。

図4-1-1 乳幼児期の養育行動

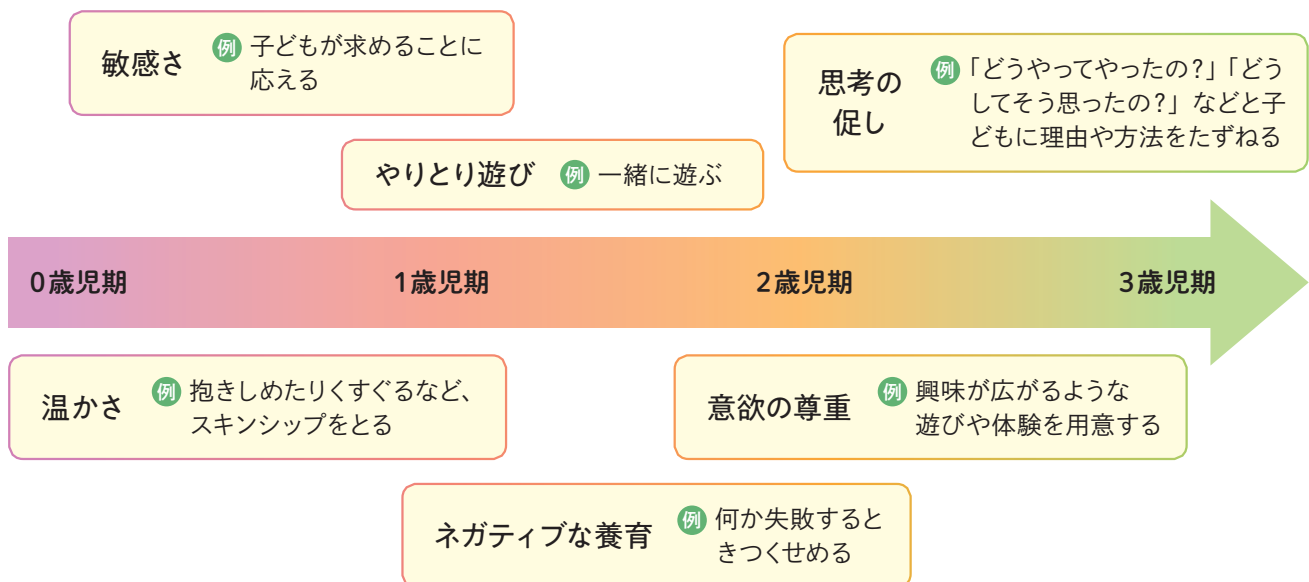
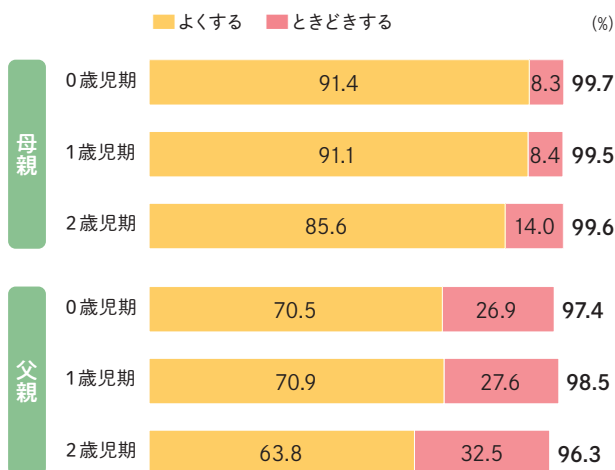
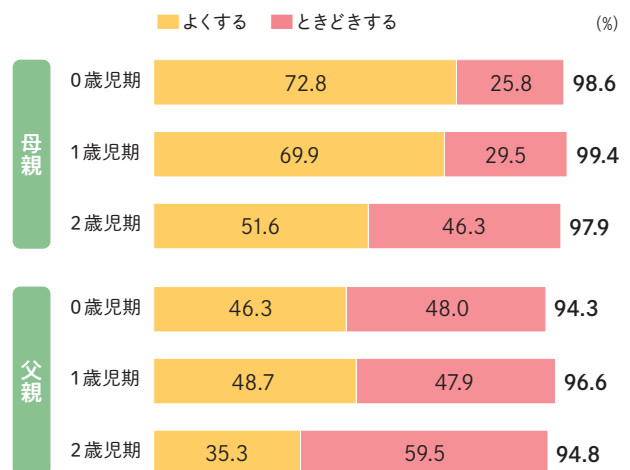


図4-1-2 抱きしめたりくすぐるなど、スキンシップをとる



※右の数値は「よくする」+「ときどきする」

図4-1-3 子どもが求めることに応える



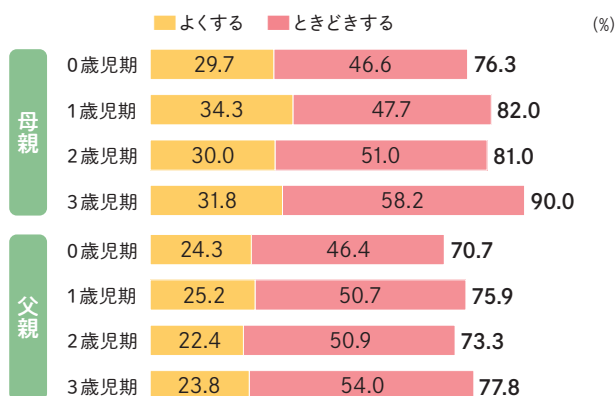
※右の数値は「よくする」+「ときどきする」

養育行動とアタッチメント形成

教育的な関わりは
 幼児期前期に母親・父親ともにその頻度が増加。

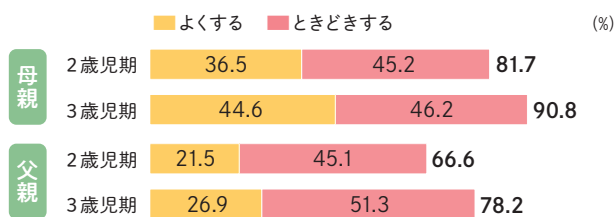
教育的な関わりについて、例えば、子どもの意欲を尊重する養育行動である「興味が広がるような遊びや体験を用意する」は、「よく+ときどきする」の割合が、2～3歳児期にかけて母親・父親ともに増加している。また、子どもの思考を促す養育行動である『『どうやってやったの?』『どうしてそう思ったの?』などと子どもに理由や方法をたずねる』は、2歳児期より3歳児期のほうが母親・父親ともに「よく+ときどきする」の割合が約10ポイント高いことがわかる。

図 4-1-4 興味が広がるような遊びや体験を用意する



※右の数値は「よくする」+「ときどきする」

図 4-1-5 「どうやってやったの?」「どうしてそう思ったの?」などと子どもに理由や方法をたずねる



※右の数値は「よくする」+「ときどきする」

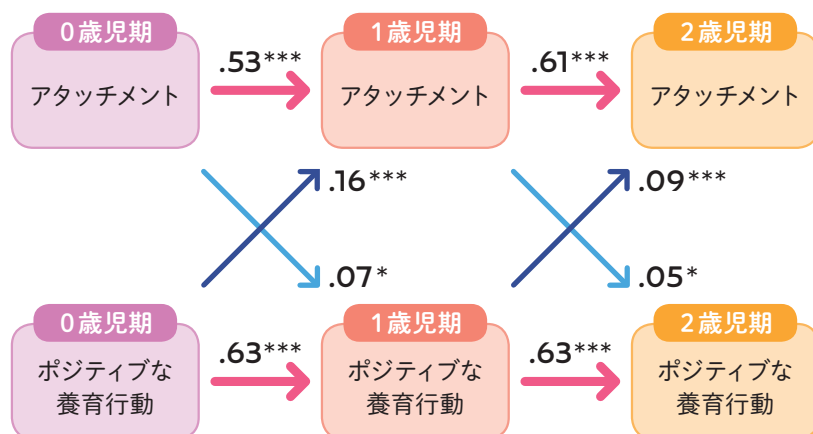
0歳児期からのポジティブな養育行動が
 乳幼児期の安定した親子関係 (=アタッチメント) につながる。

0歳児期から2歳児期までの縦断データを使って、母親のポジティブな養育行動と親子のアタッチメントがどのように関係しているかを分析した (図 4-2-1)。その結果、子どもの月齢、就園の有無、母親の就労の有無、母親の学歴、世帯年収に関係なく、アタッチメントは親子のポジティブな関わりの中で形成されていくことが示された。0歳児期のポジティブな養育行動がアタッチメントに与える影響は相対的に大きい、0歳児期から2歳児期にかけてアタッチメントがポジティブな養育行動を引き出すという、「親子が互いに影響を与えながら育ちあう」可能性も示唆された。

アタッチメントとは

アタッチメントとは、子どもと養育者の間の情緒的なつながりのことを指す。子どもが怖いときや不安を感じたときに特定の大人 (=養育者) と「くっつく (アタッチ)」ことでそのネガティブな感情を調整しようとする欲求および行動の傾向である。子どもがシグナルを出したときに、養育者が子どもの気持ちに気づいて応じたり、寄り添ったりする日常的な関わりを通して、子どもは「自分は守られている」、「愛される存在だ」という人や社会に対する基本的信頼感や安心感を得る。このような親子の関わりによって乳幼児期にかけてアタッチメントが形成され、生涯にわたって子どもの心身の発達 (後の社会情動的発達など) や対人関係などに影響する。

図 4-2-1 母親の養育行動とアタッチメント形成



※ポジティブな養育行動:「温かさ」4項目、「敏感さ」3項目、「やりとり遊び」4項目、「意欲の尊重」4項目の合計得点

※交差遅延モデルの分析結果。標準化係数。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

※子どもの月齢、子どもの就園の有無、母親の就労の有無、母親の学歴、世帯年収は統制

ベネッセ教育総合研究所の web サイトのご紹介

本プロジェクトや
ベネッセ教育総合研究所が行った他の調査結果を掲載しています。

ベネッセ教育総合研究所

検索

<https://berd.benesse.jp/>



ベネッセ教育総合研究所では、各研究室の調査研究レポートと、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、大学の教職員を対象とした情報誌を web サイトに掲載しています。

発行日 2021年3月31日
発行人 谷山 和成
編集人 高岡 純子
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所
東京都多摩市落合 1-34
企画・制作 ベネッセ教育総合研究所
デザイン (有)ペンダコ

